上田市文化財調査報告書第34集

史跡信濃国分寺跡

史跡現状変更申請に伴う緊急発掘調査報告書

1989年3月

上田市教育委員会

『史跡信濃国分寺跡』正誤表

頁	行	該当箇所	誤	正
13		第2表挿図番号14器形の特徴	指圧痕	押圧痕
34		第5表挿図番号8器種	湾	碗
48		第9表挿図番号1～3備考	磨毛	磨耗
49		第25図縮小率	1：1	1：3
50		第26図縮小率	1：2	1：3
60		図版八	同耳土器	内耳土器

上田市文化財調査報告書第34集

史跡信濃国分寺跡

史跡現状変更申請に伴う緊急発掘調査報告書

１９８９年３月

上田市教育委員会

1 縁釉陶器
（ＳＢ-02 出土）

2 土師器、灰釉陶器（ＳＢ-02 出土）

3 灰釉陶器
（ＳＢ-01 出土）

序

信濃国の古代史上に燦然と光を放って存在していた信濃国分寺は千二百年を経た今、その跡地が史跡公園として整備され、その栄華を現在に伝えています。

昭和３８年から４６年まで８次にわたって実施された信濃国分寺跡の発掘調査は、当時第一線で活躍されていた諸先生方の御指導と御尽力のもと、未曾有の規模で実施され、その成果は当時の考古学研究や古代史研究の上に大きな影響を与え、これまた光彩を放つものとなりました。この間、昭和４３年には史跡追加指定を受け、その後、この貴重な文化遺産を後世に末永く伝えるため史跡公園として整備されました。また昭和５５年には調査の成果を収める信濃国分寺資料館が建設され、訪れる多くの市民の研究の場として、あるいは憩いの場として今日に至っています。

一方、史跡指定地及びその周辺は、昭和４０年代から都市化・宅地化が進行し、現在年間１０件余りの住宅・店舗等の新増改築の現状変更申請が提出されています。上田市教育委員会といたしましても、住民の方々の生活権や利便と、史跡の保護をどう両立すべきか常々苦慮しているところであります。

このたび、山辺資保氏から氏の所有される、史跡公園に隣接する指定地内、尼寺の築地遺構の予想される地において住宅新築の現状変更申請があり、文化庁、長野県教育委員会の御指導により発掘調査を実施し、その結果を待って申請の可否を判断する運びとなりました。

調査は、調査団長を上田市文化財保護審議会委員で、先に申し上げた信濃国分寺跡の調査に当たられた五十嵐幹雄先生に、また、調査主任を岩佐今朝人先生にお願いし、信濃では春未だ浅い４月から５月にかけて実施しました。この結果、この調査地には信濃国分寺に直接結び付く遺構は検出されませんでしたが、緑釉陶器をはじめ、国分寺廃絶後の私たちの祖先の活動の一端を示す遺構、遺物が出土しました。

今後もこうした現状変更に伴う調査は続くものと思われますが、この偉大な文化遺産を後世に引継ぐべく、最大の努力を図っていく所存であります。

今回の調査にあたり、地権者の山辺資保氏には終始絶大な御理解と御協力を戴き、無事調査を終了することができました。また、調査に当たって戴いた先生方には、お忙しいところを調査に御尽力いただきました。衷心より感謝申し上げる次第です。

最後に、地域住民の皆様のますますの御理解と御協力をお願いしつつ、序の言葉といたします。

平成元年３月２５日

上田市教育委員会
教育長　赤羽　登

例　言

1．本書は長野県上田市大字国分字明神前の史跡信濃国分寺跡指定地内における現状変更に伴う、昭和６３年度史跡信濃国分寺跡発掘調査報告書である。

2．調査は、上田市教育委員会が上田市文化財保護審議会委員五十嵐幹雄を調査団長として、史跡信濃国分寺発掘調査団を編成し、調査を委託して実施した。なお、事務局は上田市教育委員会社会教育課においた。

3．発掘調査は遺物整理、報告書刊行まで含めて１９８８年（昭和63年）４月４日から１９８９年（平成元年）３月２５日まで実施した。この間の調査は調査団長五十嵐、調査主任岩佐今朝人の指導の下、川上元、倉沢正幸、中沢徳士があたり、調査補助員・作業の協力をいただいた。

4．遺構の実測は中沢・末永成清が行い、トレースを中沢・末永・上野・宮下が行った。

5．遺物の実測は、川上・倉沢・末永が行い、トレースを倉沢・中沢・末永・上野・宮下が行った。

6．本文の執筆は五十嵐・岩佐・川上・倉沢・中沢が行い、文責は文末に記した。なお、遺物の観察は実測者が行っている。

7．遺構の写真撮影は中沢・末永が、遺物の写真撮影は川上・倉沢が行った。

9．本遺跡の資料は上田市教育委員会の責任下、上田市立信濃国分寺資料館に保管している。

10．本書の編集作業は、倉沢、中沢が行った。

11．本調査にあたり下記の皆さんにご協力、ご助言を賜った。記して感謝する次第である。

山辺資保、塩入秀敏、猪熊啓司、関孝一、小林秀夫、児玉卓文、百瀬長秀（順不同、敬称略）

凡　例

1．挿図の縮尺は、調査地区全体が１／３００、住居址・ピット・溝址が１／６０、竈が１／３０、出土遺物は原則として１／３の縮尺である。

2．図版の遺物写真は、小破片を除いて主な遺物を掲載した。

3．出土遺物一覧表〔土器〕の法量は、上から口径・底径・器高の順に記載し、無記載は不明である。

4．土層の色調、遺物胎土の色調については『新版標準土色帖』（1988年版）に基づいて表示した。

5．挿図中のスクリーントーンは、遺構断面が斜線、竈・火床が網点（細）、土器の黒色研磨が網点（太）を用いて表示してある。

目　　次

序
例　言
目　次
挿図目次
付表目次
図版目次
第Ⅰ章　序　説
　第1節　調査に至る経過 …… 1
　第2節　調査の体制 …… 1
　第3節　調査日誌 …… 2
第Ⅱ章　遺跡の環境
　第1節　位置及び自然環境 …… 3
　第2節　歴史環境 …… 4
第Ⅲ章　調査の結果
　第1節　検出された遺構 …… 7
　第2節　出土遺物 …… 11
第Ⅳ章　まとめ …… 51
図版 …… 53
あとがき

挿　図　目　次

第１図　国分寺付近の段丘 …… 3
第２図　史跡信濃国分寺跡の位置 …… 5
第３図　調査地区全測図 …… 6
第４図　第１号住居址実測図 …… 7
第５図　第２号住居址実測図 …… 8
第６図　第２号住居址竈実測図 …… 9
第７図　第１～３号ピット、第１号溝址実測図 …… 10
第８図　第１号住居址（ＳＢ－０１）出土遺物実測図 …… 12
第９図　第２号住居址（ＳＢ－０２）出土遺物実測図〈１〉 …… 15
第10図　第２号住居跡（ＳＢ－０２）出土遺物実測図〈２〉 …… 16
第11図　第２号住居跡（ＳＢ－０２）出土遺物実測図〈３〉 …… 18
第12図　第２号住居跡（ＳＢ－０２）出土遺物実測図〈４〉 …… 19
第13図　グリッド内出土土器実測図〈１〉 …… 25
第14図　グリッド内出土土器実測図〈２〉 …… 26
第15図　グリッド内出土土器実測図〈３〉 …… 27
第16図　中世、近世の出土土器実測図 …… 33
第17図　内耳土器実測図〈１〉 …… 35
第18図　内耳土器実測図〈２〉 …… 37
第19図　布目瓦拓影図〈１〉 …… 39
第20図　布目瓦拓影図〈２〉 …… 41
第21図　布目瓦拓影図〈３〉 …… 42
第22図　布目瓦拓影図〈４〉 …… 43
第23図　石製品実測図〈１〉 …… 46
第24図　石製品実測図〈２〉 …… 47
第25図　銭貨拓影図、角釘実測図 …… 49
第26図　金属製品、鉄滓実測図 …… 50

付　表　目　次

第1表　国分寺付近の各段丘 …… 4
第2表　第1号住居址（SB－01）出土遺物一覧表 …… 11
第3表　第2号住居跡（SB－02）出土遺物一覧表 …… 20
第4表　各グリッド内出土遺物一覧表 …… 28
第5表　中世、近世の出土土器一覧表 …… 32
第6表　内耳土器一覧表 …… 36
第7表　布目瓦一覧表 …… 40
第8表　石製品一覧表 …… 47
第9表　銭貨一覧表 …… 48
第10表　金属製品、鉄滓一覧表 …… 50

図　版　目　次

図版一　調査地区全景・ピット・溝址 …… 53
図版二　第1号住居址・第2号住居址・遺物出土状況 …… 54
図版三　第2号住居址・第2号住居址竈 …… 55
図版四　第2号住居址遺物出土状況・第1号住居址出土遺物 …… 56
図版五　第2号住居址出土遺物 …… 57
図版六　第2号住居址出土遺物・各グリッド内出土遺物 …… 58
図版七　中世、近世の出土土器・内耳土器 …… 59
図版八　内耳土器・布目瓦 …… 60
図版九　石製品 …… 61
図版十　銭貨・角釘・鏃先・鉄滓 …… 62

第Ⅰ章　序　　説

第1節　調査に至る経過

昭和62年3月5日、上田市大字国分1514 7の山辺資保氏から、同氏所有の上田市大字国分字明神前の畑地に住宅を新築したい旨の現状変更申請が提出された。申請地は史跡信濃国分寺跡の国分尼寺の築地推定ラインの隣接地であり、場合によっては申請地にかかる可能性もあった。このため、上田市教育委員会ではこの旨の意見書を添えて文化庁長官あて進達したところ、昭和62年8月11日付け委保第4の313号で文化庁から、「事前の発掘調査の結果を待って処理することが適当である」との通知を受けた。

上田市教育委員会ではこの通知を受けたが、同年度の調査は予算措置が難しく、また、調査費も300万円にのぼるため、山辺氏の御了解も戴き、昭和63年度の国庫、県費補助を受けて調査を実施することとした。

昭和63年3月15日、信濃国分寺資料館で調査員予定者による調査会議を開催し、調査の計画、方法等について協議し、4月1日付けで史跡信濃国分寺跡発掘調査団を編成、同調査団に事業を委託した。4月4日、調査地の立木の伐採を行い、翌5日鍬入式を挙行し、調査を開始した。

第2節　調査の体制

上田市教育委員会はこの調査にあたり、新たに史跡信濃国分寺跡発掘調査団を編成し、同調査団に事業委託して実施した。

調査団の構成および調査協力者は次のとおりである。

史跡信濃国分寺跡発掘調査団名簿

団長	五十嵐幹雄	（上田市文化財保護審議会委員・日本考古学協会員）
調査主任	岩佐今朝人	（上小考古学会長・日本考古学協会員）
調査員	川上元	（上田市立博物館庶務学芸係長・日本考古学協会員）
〃	倉沢正幸	（長野県考古学会員・信濃国分寺資料館学芸員）
〃	中沢徳士	（〃・社会教育課学芸員）
〃	塩崎幸夫	（〃・社会教育課嘱託）
事務局長	清水万伴	（社会教育課長）
事務局次長	富田篤	（社会教育課文化係長）
事務局員	中沢徳士	（社会教育課学芸員）

発掘・整理作業参加者

木永成清（調査補助員）、佐藤蔵三、堀内今朝次、長浜峰吉、関茂樹、中沢良一、清水三咲、岩下真、中沢謙光、清水正剛、柳沢仁美、松井正信、宮下信子、上野良幸（順不同、敬称略）

第3節　調　査　日　誌

昭和63年

4月4日（月）晴時々曇　　作業員に調査手順の説明をしたのち、調査地の立木の伐採、清掃を行う。続いてグリッド（3×3m）を設定し、試掘グリッドを掘る。

4月5日（火）曇後雨　　午前鍬入式。試掘グリッドを昨日に引き続き掘る。『紹聖元宝』出土する。

4月6日（水）晴　　重機による表土剥。調査地東側から布目瓦が多く出土する。

4月7日（水）～9日（土）　　表土剥及び遺構検出作業。

4月11日（月）晴　　遺構の在り方が明確に把握できないため、4本のトレンチを入れる。調査地北東にピット2個検出する。

4月12日（火）曇　　土層図、ピットセクション図、集石の平面図等を作製する。

4月14日（木）曇後晴　　礫群の性格が把握しかねる。今後再度掘下げることとする。E－2グリッドから足高高台付坏、内黒土師器坏、内耳土器等出土、平安期の住居址が予想される。

4月15日（金）晴　　午前、上田市文化財保護審議会委員の赤塩一己氏が礫の鑑定に来訪。礫は千曲川水系の安山岩で、砂礫層は千曲川河岸段丘の地山であろうと指摘される。

4月16日（土）
～5月4日（水）　　グリッドを更に掘り下げる一方で、念の為に礫群の実測を行う。

5月5日（木）晴　　SB－01検出、掘下げにかかる。

5月7日（土）曇後雨　　調査区北東隅、P－1，2，3を検出したローム層にトレンチを入れる。特に版築した形跡はみられなかった。

5月9日（月）晴　　調査区南西隅のSB－2の検出作業。灰釉陶器皿、土師器高台付坏出土。

5月10日（火）晴　　SB－2掘り上げ。緑釉陶器、羽釜片出土する。

5月12日（木）～14日（土）　　遺構全体清掃及び実測作業。

5月16日（月）～19日（木）　　遺構の埋め戻し作業。

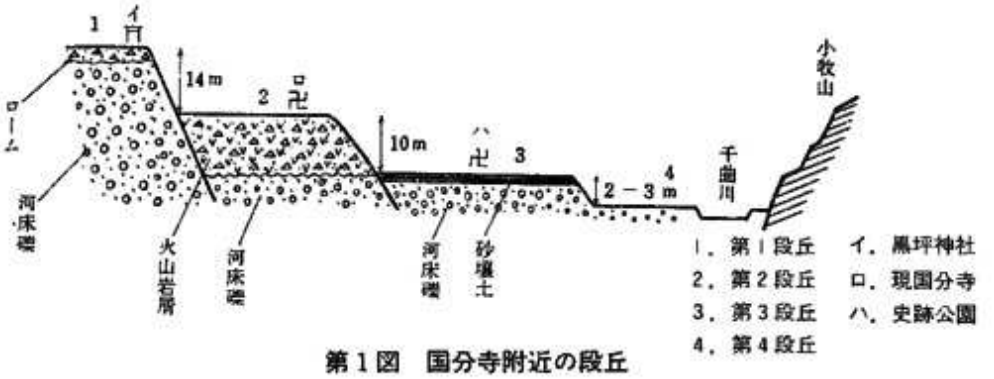
5月19日、現場調査終了し、この後、上田市立信濃国分寺資料館において遺物の整理作業、報告書作成作業を実施し、平成元年3月25日、調査報告書を刊行して調査はすべて終了した。

第II章　遺跡の環境

第1節　位置および自然環境

今回の調査地域は長野県上田市大字国分に在り、信濃国分寺史跡公園の南西隅に隣接する山辺資保氏の所有する宅地である。信濃国分寺史跡公園のすぐ北側は国道１８号線が東西に走り、ＪＲ信越線はこれに平行して公園内を切って敷設されている。この地に立って北方を眺めれば、約３００m先方に第二段丘崖が東西に続き、その上方には、上田市のシンボルともいえる太郎山の雄姿が見られる。振返って目を南方に転ずれば直下は千曲川の氾濫原に当る平坦面が開け、その先に、千曲の本流が流れている。川の対岸には小牧山塊が手にとるように眺められる。

この附近の地形は上小地方の模式的な段丘地形といわれ、四段にわたるひな壇のような地形である。第１段丘（比高約２０m）は染屋面ともいい、黒坪神社附近を要として、北の太郎山山麓線を流れる蛇沢川を縁辺とする扇状の一大台地である。右辺は神川で切られているので、神川を遡って新屋以北まで伸び、左辺は小岩門、染屋の段丘崖から愛宕神社の段丘崖まで、扇端は愛宕神社から新屋の神川で切られたところまで達している。この台地には新屋、岩門、西野竹、染屋等の集落が含まれている。



第１図　国分寺附近の段丘

第２段丘（比高約１０m）は国分面ともいい帯状に形成されている。神川西岸より発し、黒坪国分、上堀、から上田市街地のほとんどを含めた地域で秋和近くまで達している。第３段丘（比高約２m）は、八日堂面ともいい今回の調査個所及び国分寺の所在する面である神川の河口から幅狭く西南方へ弧状に発達し、国分寺史跡公園附近が最も広く約３００mとなっている。上沢の集落がある。第４段丘は氾濫原に当り下堀面ともいい千曲川満水時の折り上流より運搬された堆積面で、四つの段丘の中で一番狭くまた比高も現河床よりやや高いという程度である。次表（「郷土の地誌上田盆地」上田市立博物館刊）は各段丘を表にまとめたものであるが、更に詳しく読みとることができる。

	第1段丘面	第 2 段 丘 面	第3・第4段丘面
土 質	耕土浅い 強粘土	耕土稍浅い 表層砂土 （下）火山砕屑	耕土深い 砂質壌土 （下）河床礫
地下水面	13m以上	7m（国分に井戸二つあり）	4～3m
土地利用	集落なし 水田のみ 一毛作	黒坪・国分・上堰 田6・畑4の割合 半分二毛作（米麦）	上沢・下堰 田4、畑6の割合 野菜よし　全部二毛作
田の等級	6～7等	4～5等	1～3等
田の収穫量（100坪当り）	米9斗	1．0石	1．1石

第1表　国分寺附近の各段丘

第2節　歴史環境

1．第1段丘面

この面はローム層の風化による強粘土地帯で、地下水も低く得にくいため、広大な面積のわりには遺跡数も少なく、また小規模である。それでも、水の得られそうな個所に縄文、弥生時代遺跡が小規模ながら点在している。古墳は神川沿いの崖垂上に、横穴式石室を有する後期の円墳が所々にある。特に矢花地籍には多くあり、古墳群を形成している。歴史時代に至り条里的遺構が展開され、この時代になり農耕地として開発が進んだことを物語っている。古里地籍が創置の信濃国府所在地とされるのはこの遺構とも大きく係わっている。

2．第2段丘面

現国分寺をはじめ各時代の遺跡が数多く知られている。発掘地点の近くには弥生時代の遺構をともなった赤塚遺跡、昭和46年調査した平安時代の堂西遺跡がある。また信大繊維学部敷地遺跡は弥生時代後期から古墳時代にわたる大遺跡であり、更に北方の太郎山山麓の扇状地帯には縄文、弥生、古墳時代の生活をたどれる遺跡が多数発見でき、古墳も多く、ことに上小地方唯一の前方後円墳である二子塚もあり、道場、西沖には後期の円墳が数多く存在している。条里的遺構はこの面にも展開され、古代、中世の開発のようすが窺える。

3．第3段丘面

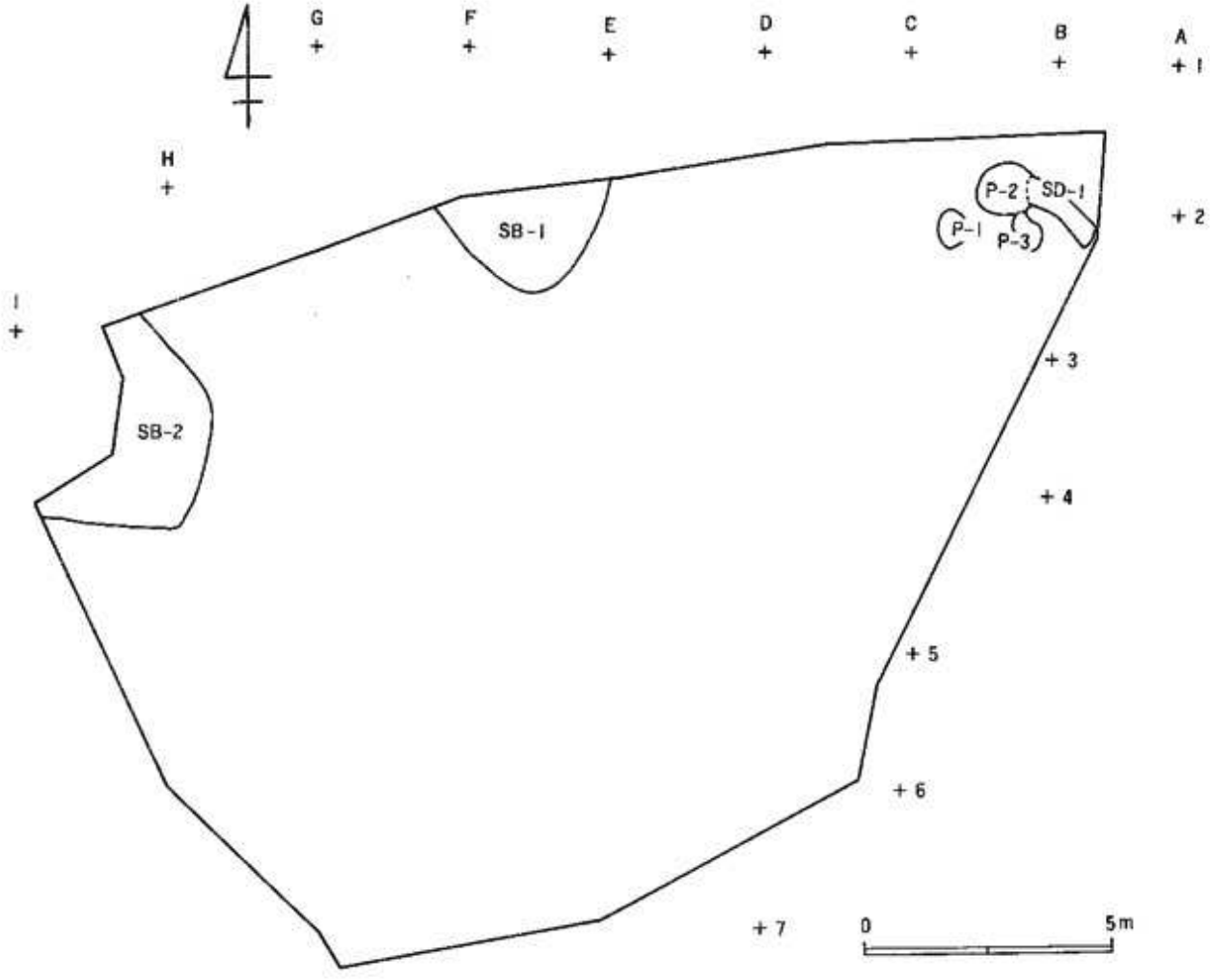
昭和23年の国道18号線開発工事の際、上沢浦沖遺跡では縄文中期から平安時代に至る住居跡やそれにともなう遺物が多く発見された。この面は古代信濃国分寺が建立された。そのため、これに関連した遺構、遺物も多く発見されつつあり、古代東山道もこの面を通じていたと推定している。

4．第4段丘面（氾濫原）

千曲川の満水時に堆積された地帯なので、地味はよく農耕地として可能であったが、治水工事の進んだ江戸時代からの開発である。北国街道が東西方向に通じ、農耕地（桑園）として利用された。また道路に沿い逐次人家が建てられ、住居地として現在も進んでいる。　（岩佐今朝人）

第２図　史跡信濃国分寺跡の位置

52　染屋台条里水田跡遺跡（弥生～平安）
54　国分遺跡群（弥生～平安）
55　信濃国分寺跡（奈良，平安）
56　国分寺周辺遺跡群（縄文～平安）
57　常入遺跡群（縄文～平安）
83　坂下古墳（古墳）



第3図　調査地区全測図

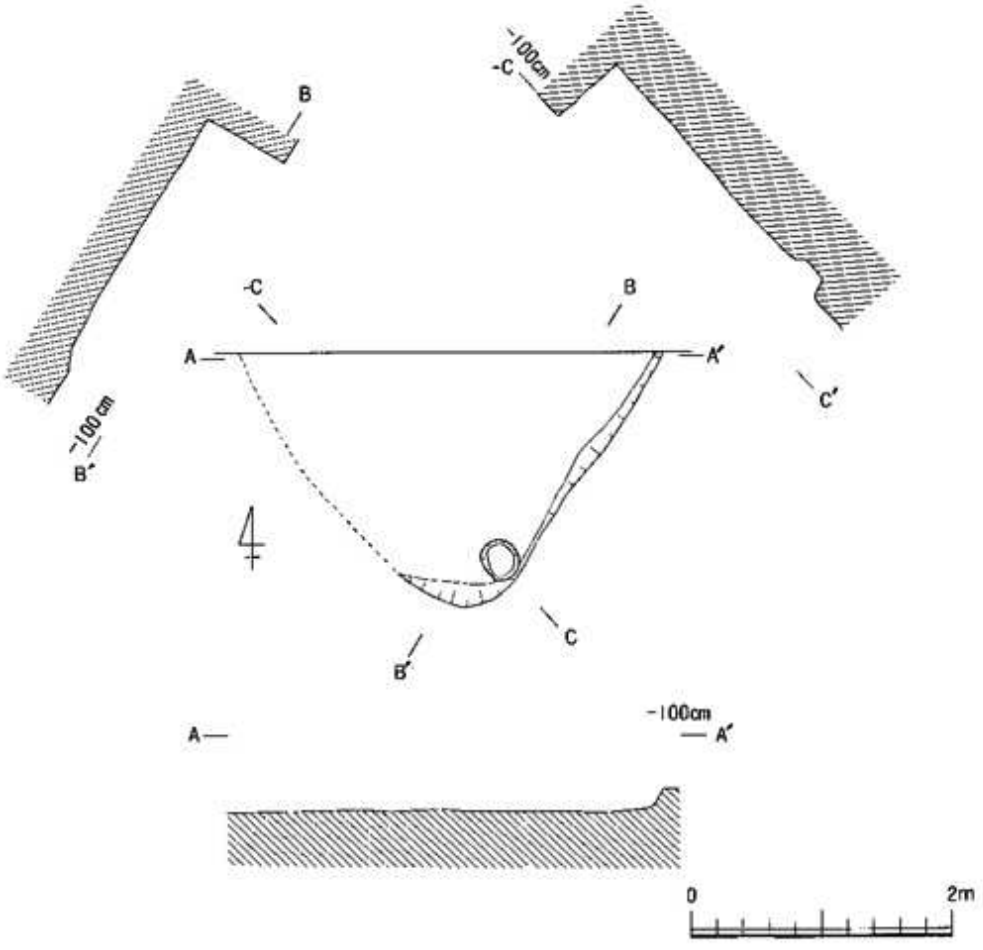
第Ⅲ章　調査の結果

第１節　検出された遺構

１　第１号住居址（ＳＢ－０１）

第１号住居址は調査区の北辺、Ｅ－２、Ｆ－２グリッドにかけて検出された。遺構の大部が調査区域外となっていたため、明確なプランは把握しえなかったが、隅丸方形の平面形態を呈すると思われる。また、撹乱のため南西壁が破壊されており、僅かに床面が残っているのみだった。検出された範囲では南東壁が 2.5m、南西壁が 2.6mであり、壁高は15cm前後である。覆土は石を多量に含む黒色土である。

柱穴は住居址の南コ‥ナーに１個検出された。31cm×28cm深さ７cmである。

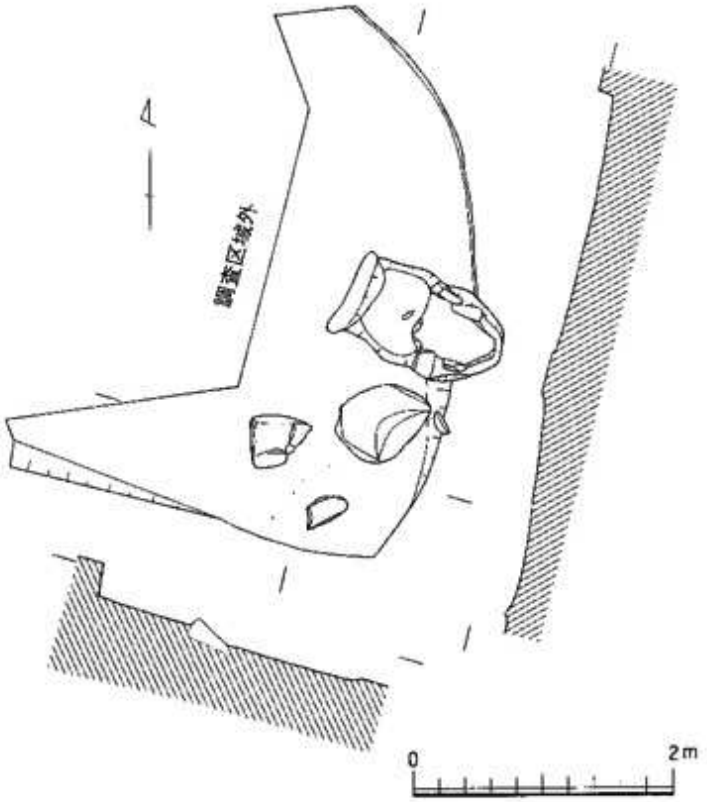


第４図　第１号住居址実測図

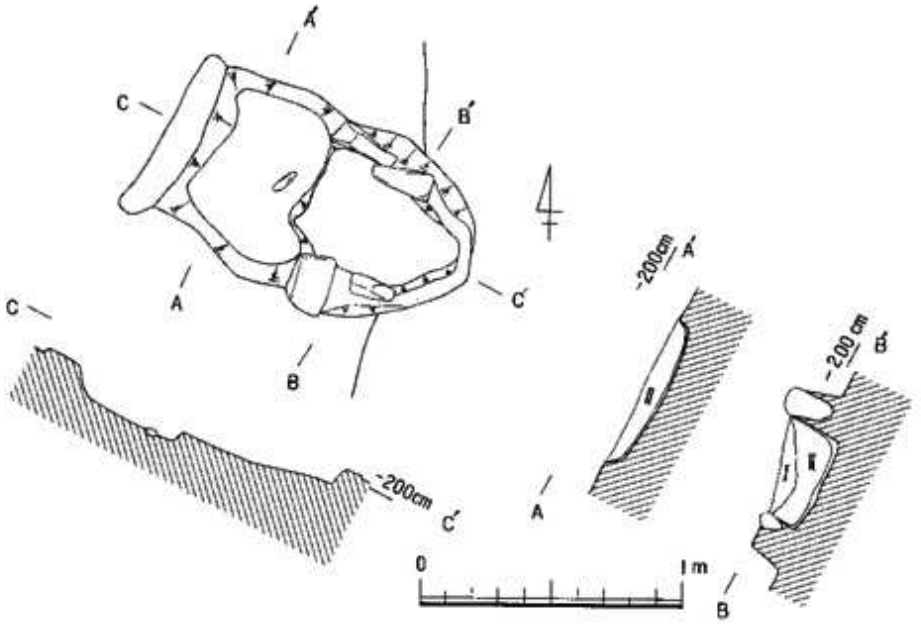
2．第２号住居址（ＳＢ－０２）

第２号住居址は調査区の北西隅、Ｇ－３、II－３・４グリッドにかけて検出された。この住居址も遺構の大部が調査区域外となっていたため、明確なプランは把握できなかったが、住居址東壁に竈が遺存していた。竈の主軸方位はＮ－ 118°－Ｅを指す。規模は全長1.16m、最大幅0.75m、焚口幅0.61m、煙道長 0.7mである。両袖は全壊しており、火床部は床面を６cmほど掘り込んで構築されており、煙道寄りの位置に支脚が倒置した状態で出土している。煙道部は火床部より５cm高く約９°の角度で住居址外に向かって登っている。煙道部には両袖に芯材に用いた石が露出した状態で出土している。覆土は２層で、Ｉ層が黄橙色の砂礫土、II層が炭化物・灰を含む黒色土で、その下に焼土が１cmほど堆積していた。

なお、焚口部手前には堅く叩き締めた粘土が貼られていた。



第５図　第２号住居址実測図



第6図　第2号住居址竈　実測図

3．第1号ピット（P－1）

第1号ピットは調査区の北東隅、B－2グリッドにおいて検出された。規模は85cm×68cm深さ15cmである。覆土は2層で、I層が細かな炭化物を含む黒褐色土で、II層が茶褐色砂礫土である。

4．第2号ピット（P－2）

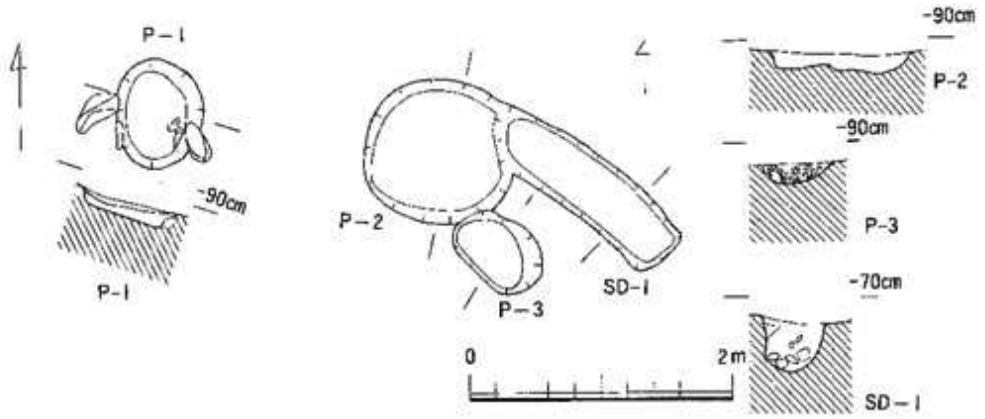
第2号ピットは調査区の北東隅、B－1～2グリッドにおいて検出された。規模は116cm×112cm深さは最深部で15cmを測る。覆土は1層で、細かな炭化物を含む黒褐色土である。

5．第3号ピット（P－3）

第3号ピットは調査区の北東隅、B－2グリッドにおいて検出された。規模は73cm×50cm深さ15cmを測る。覆土は1層で、礫を含む黒褐色土である。

6．第1号溝址

第1号溝址は調査区の北東隅、A－2、B－2グリッドにおいて検出された。規模は幅45～47cm、長さ約1.6m、深さは40cm前後を測る。覆土は1層で、砂礫を含む暗黒褐色土である。



第7図　第1～第3号ピット、第1号溝跡　実測図

7．その他

調査区域内においては他に、第1、2号住居址検出面の上層に、近現代の建築の基礎に用いた集石があった。また、調査区南部には7m×2mにわたって拳大の礫群が検出されているが、これを断ち割るトレンチ調査により、これも最近の建築物に伴うものと判断された。

その他、あるいは礎石かと思われる石も数点検出されたが、これらを結ぶ建物址等のプランは見られなかった。

調査区域内は50～60cmから拳大の石と、砂礫が一面に広がり、住居址もこれらを掘り窪めて構築している。すなわち、この地域の第1、2号住居址の前代は千曲川の氾濫原であったか、もしくは大規模な氾濫を受けているものと考えられよう。　（中沢徳士）

第２節　出土遺物

１．第１号住居址（ＳＢ－０１）出土遺物

調査地区の北辺に位置する第１号住居址（ＳＢ－０１）より出土した遺物は１４点である。いずれも住居址覆土中からの出土である。なおこの住居址覆土には拳大から小児の頭大程度の大きさの礫が多数混入していた。

１は土師器皿の小片で、口縁部が大きくくの字状に外反している。内面は黒色研磨されている。２は土師器坏で、内面が黒色研磨されており、見込部から体部にかけて放射状暗文が施されている。胎土は小砂粒、金雲母を含み焼成は良好である。底部は高台が欠損している。右回転の糸切り痕が残る。

４は土師器片で、内面が黒色研磨されている。５は土師器坏で、内面が丁寧にヘラ磨きされている。外面は橙色で、明るい色調である。６は土師器坏である。口縁部は内側へ肥厚し、内面は丁寧に黒色研磨されている。

８は土師器坏で、内面が黒色研磨されている。見込部から体部にかけて放射状暗文が施されている。底部は切り離した後、回転ヘラケズリが行われており、貼り付け高台である。１１は土師器坏で、底部は切り離した後、回転ヘラケズリが行われている。高台は貼り付け高台で、整形が粗雑であり、一部歪みが生じている。

１２は土師器坏で、底部は切り離した後、回転ヘラケズリが行われている。胎土は小砂粒、黒雲母を含み、焼成は良好である。１１、１２の坏は高台部が薄くて高い、いわゆる足高高台付坏とみられる資料である。

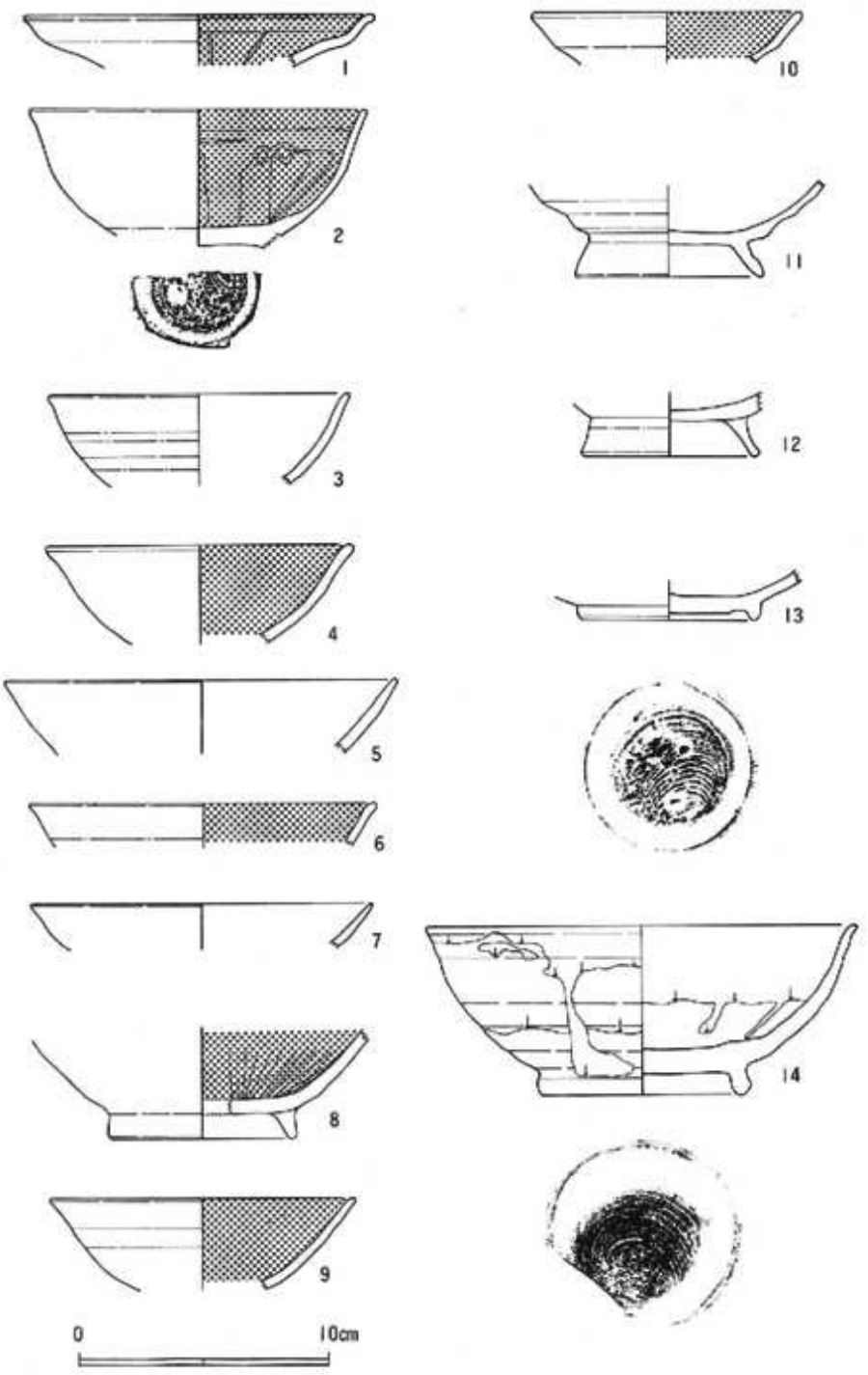
１３は灰釉陶器の壺である。体部の一部に漬け掛けによる薄い白色の釉が施されている。底部は右回転の糸切り痕が明瞭に残っている。１４も灰釉陶器の壺である。胎土は精良で、内外面に漬け掛けによる淡い白色の釉が施されている。口縁部に指頭ないしはヘラ状工具による押圧痕が推定５カ所みられる輪花壺である。底部は右回転の糸切り痕が残っている。高台部の断面先端は丸味を帯び、高台の付け方はやや粗雑である。

こうした点から１３、１４の灰釉陶器壺は、共に１１世紀以降の東濃系灰釉陶器と推定される。また前述した１１、１２の足高高台付坏とみられる資料が住居址内から出土しており、本住居址は１１世紀以降の平安時代後半の所産と考えられる。

（倉沢正幸）

第２表　第１号住居址（ＳＢ－０１）出土遺物一覧表

挿図番号	器種	法量 (cm)	残存度	色調 外面	色調 内面	器形の特徴	調整	備考
1	皿 (土)	14.1 — —	1／6	明褐灰色 (5YR7/2)	黒色 (N1.5)	口辺部外反 口縁部くの字状に大きく外反	外面　口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨　体部に暗文	胎土は小砂粒を含む



第8図　第1号住居址（ＳＢ－０１）出土遺物実測図（1：3）

挿図番号	器種	法量 (cm)	残存度	色調 外面	色調 内面	器形の特徴	調整	備考
2	坏 (土)	13.6 — —	1／2 (底部)	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	黒色 (N1.5)	口縁部やや外反 底部の貼り付け高台は欠損	外面 口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ 底部回転糸切り（ロクロ右回転） 内面 黒色研磨見込部から体部にかけて放射状暗文	胎土は小砂粒、金雲母を含む
3	坏 (土)	12.2 — —	1／6	赤黒色 (7.5R2/1)	暗赤灰色 (10R3/1)	口辺部内湾して外反 口縁部外反	外面 口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	胎土は小砂粒を含む
4	坏 (土)	12.4 — —	1／6	にぶい褐色 (7.5YR5/3)	黒色 (N1.5)	口辺部外反 口縁部外反	外面 口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ 内面 黒色研磨	胎土は砂粒を含む
5	坏 (土)	15.8 — —	1／6	橙色 (7.5YR6/6)	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	口辺部外反 口縁部やや外反	外面 口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデの後、丁寧にヘラ磨き	胎土は小砂粒を含む
6	坏 (土)	14.0 — —	1／8	黒褐色 (10YR3/1)	黒色 (N1.5)	口縁部肥厚しやや外反	外面 口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ 内面 丁寧に黒色研磨	胎土は精良
7	坏 (土)	13.8 — —	1／8	にぶい黄橙色 (10YR6/4)	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	口辺部外反	外面 口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	胎土は小砂粒を含む
8	坏 (土)	— 7.6 —	1／3 (底部)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	黒色 (N1.5)	底部貼り付け高台 体部外反	外面 体部ロクロヨコナデ 底部回転ヘラケズリ 内面 黒色研磨 見込部から体部に放射状暗文	胎土は小砂粒を含む
9	坏 (土)	12.4 — —	1／5	橙色 (5YR6/6)	黒色 (10YR1.5)	口辺部外反 口縁部はやや外反	外面 口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ 内面 黒色研磨	胎土は小砂粒を多量に含む
10	坏 (土)	11.0 — —	1／8	にぶい橙色 (2.5YR6/4)	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	口辺部外反 口縁部肥厚しやや外反	外面 口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ 内面 ロクロヨコナデ	胎土は小砂粒を多量に含む
11	坏 (土)	— 7.6 —	完 (底部)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	体部外反 底部は貼り付け高台整形は粗雑で高台にゆがみ	外面 体部ロクロヨコナデ 底部は切り離した後回転ヘラケズリ 内面 ロクロヨコナデ	胎土は小砂粒、黒粒を含む
12	坏 (土)	— 7.1 —	ほぼ完 (底部)	赤橙色 (10R6/6)	褐灰色 (5YR5/1)	底部は貼り付け高台	外面 体部ロクロヨコナデ 底部は切り離した後回転ヘラケズリ 内面 丁寧なヘラ磨き	胎土は小砂粒、黒雲母を含む
13	瓶 (灰釉)	— 7.4 —	完 (底部)	浅黄橙色 (10YR8/4)	にぶい黄橙色 (10YR7/4)	底部は貼り付け高台	外面 体部ロクロヨコナデ 底部回転糸切り（ロクロ右回転） 内面 ロクロヨコナデ 見込部に横位のヘラナデ	胎土は精良 体部の一部に漬け掛けによる釉
14	瓶 (灰釉)	17.2 8.3 6.6	1／2	灰白色 (10YR7/1)	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	底部は貼り付け高台でやや粗雑な仕上げ 口縁部に推定3カ所の指圧痕がある輪花瓶	外面 口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ 底部回転糸切り（ロクロ右回転） 内面 ロクロヨコナデ	胎土は精良 体部の内、外面に漬け掛けによる釉

第2表　第1号住居址（ＳＢ－０１）出土遺物一覧表

2　第2号住居址（ＳＢ－０２）出土遺物

調査区の北西隅に検出された第２号住居址（ＳＢ－０２）から出土した遺物は、土師器・須恵器・灰釉陶器・緑釉陶器および布目瓦・石製品であるが、とくに土師器坏類の出土が多い。いずれも住居址東壁に確認された竈址を中心に発見されるものが多く、出土層位は床面直上というより、むしろ覆土中から検出される遺物が多かったといえる。

土　器

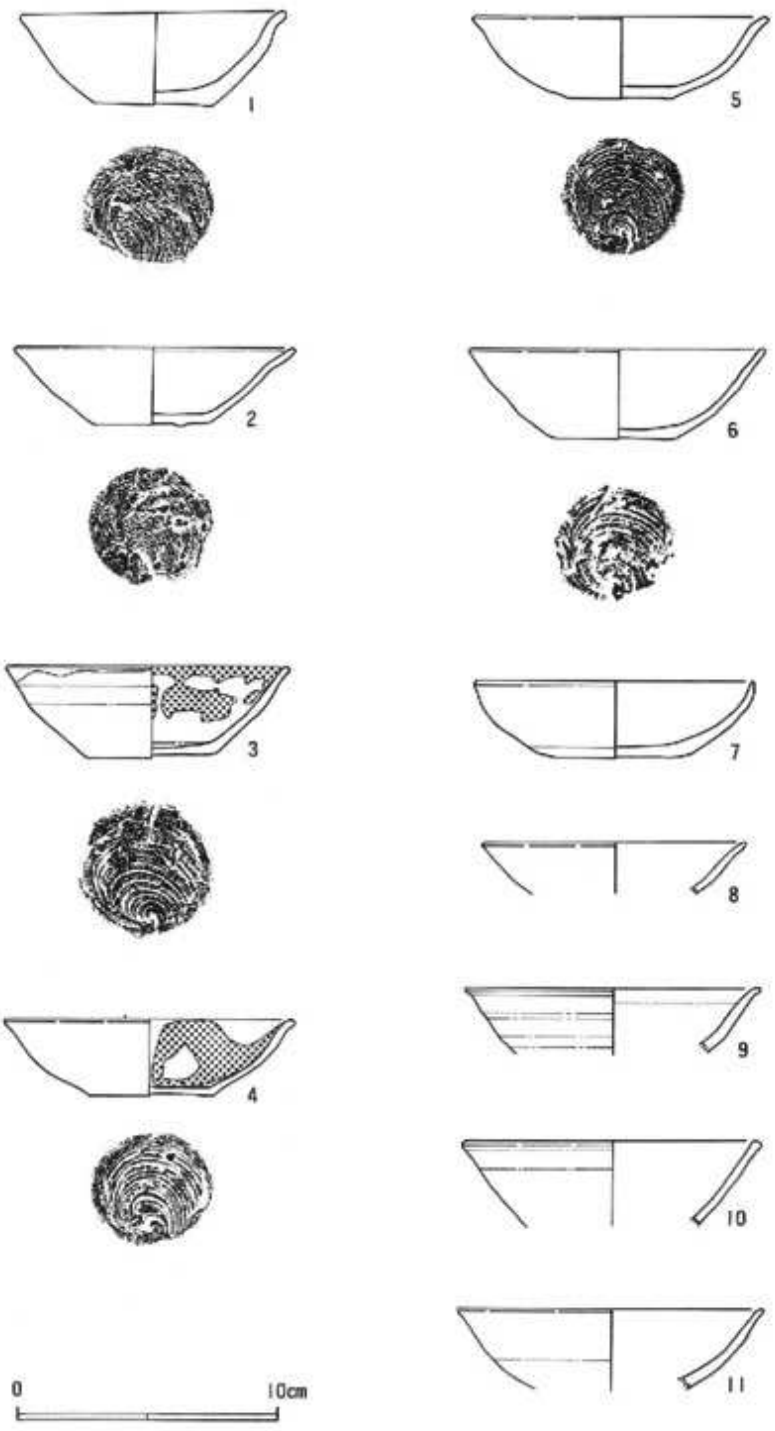
土師器坏はいずれもロクロによる成形であるが、内面黒色研磨されたものと、されないもの、また高台付坏で内面黒色研磨されたもの、ないものの４種類に大別される。

１～７は器形の全容がわかる土師器坏である。口径が10cm～11cm内外のものであり、口縁部がややくの字状に外反するもの、直線的に外反するもの、またやや内湾気味に外反するものがある。いずれも右回転のロクロによる成形で、底部に糸切り痕が明瞭に残っている。また、胎土に砂粒（細砂粒・小砂粒・砂粒）を含み焼成も良好である。１は口径に対して高さが比較的高いずんぐりとした器形を呈し、器壁が一段と厚手であることが特徴である。２は底部からの立ち上がりの外反度が強く、ほぼ一直線上に開き、さらに口縁部で外反するものである。器面は全体的に荒れが著しく、粒状の突起が内外面にみられる。

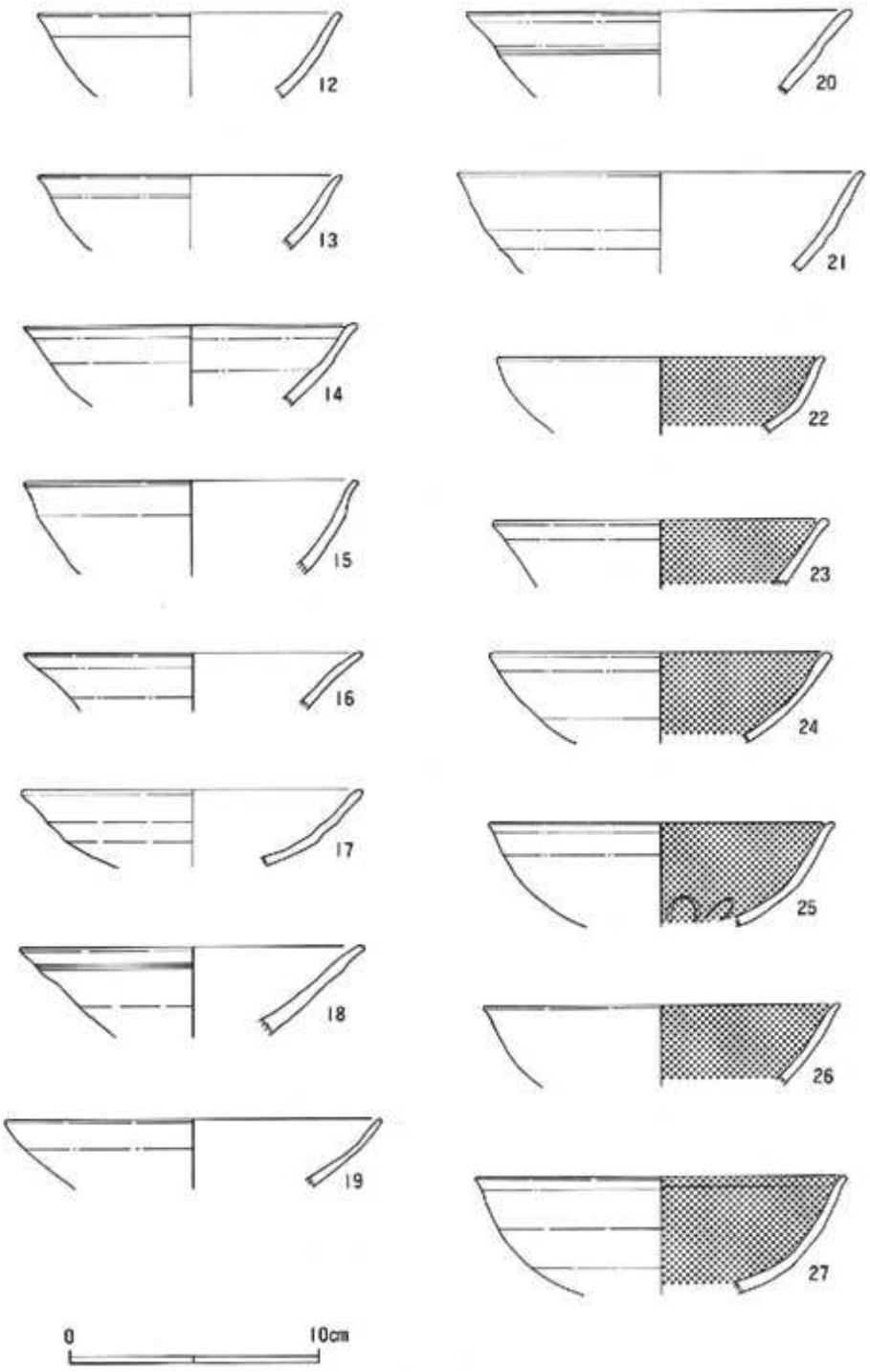
また、３の内面には多量の炭化物が付着して、燈明皿として使用されたことが明らかである。４の内面にも炭化物の付着が僅かに認められ、やはり燈明皿としての機能をもったものであろうか。５の器面も二次的な焼成によってか、内外共に荒れがみられ、部分的に色調の違いも観察できる。６は器肉が薄手に成形されており、内面の一部に黒斑がみられる。７は口縁部がやや内湾気味に外反した形状を呈している。器形もややゆがんでおり、見込部に黒い線が数本みられる。

８～２１は土師器の口縁部の破片を図上復元したもので、一応坏として分類したが、中には高台付のものもかなり含まれているものとみられる。また、坏以外の皿や鉢器形のものも含まれているだろう。８は口径が１０cm内外の小形土器であるが、あるいは皿とみたほうがよいであろうか。９は口縁部がやや折れる形状をとり、外面に成形時におけるロクロ痕が幾筋か観察される。また、１０の口縁部は肥厚し外反しているし、１１も１０とほぼ同じくらいの口径をもつ坏で、焼成良好である。１２・１３はいずれも口径１２cmを計り、ともにやや深さのある坏とみられる。また、器壁もやや厚手である。

１４・１５も外反の角度がほぼ同じであり、比較的深めのもので１４の口縁部は肥厚しているし、１５の内面はヘラミガキが施されており、全体的にツヤのある土師器といえる。１６は薄手の器壁が直線的に急角度に外反したもので、こうした形状の坏は本住居址で他にも１８のようにやや厚手ではあるが確認されている。１７は口径に対して高さが低い、むしろ皿に近い坏であるが、外面にロクロ痕が観察される。



第９図　第２号住居址（ＳＢ－０２）出土遺物　実測図〈１〉（１：３）



第10図　第２号住居址（ＳＢ－０２）出土遺物　実測図〈２〉（１：３）

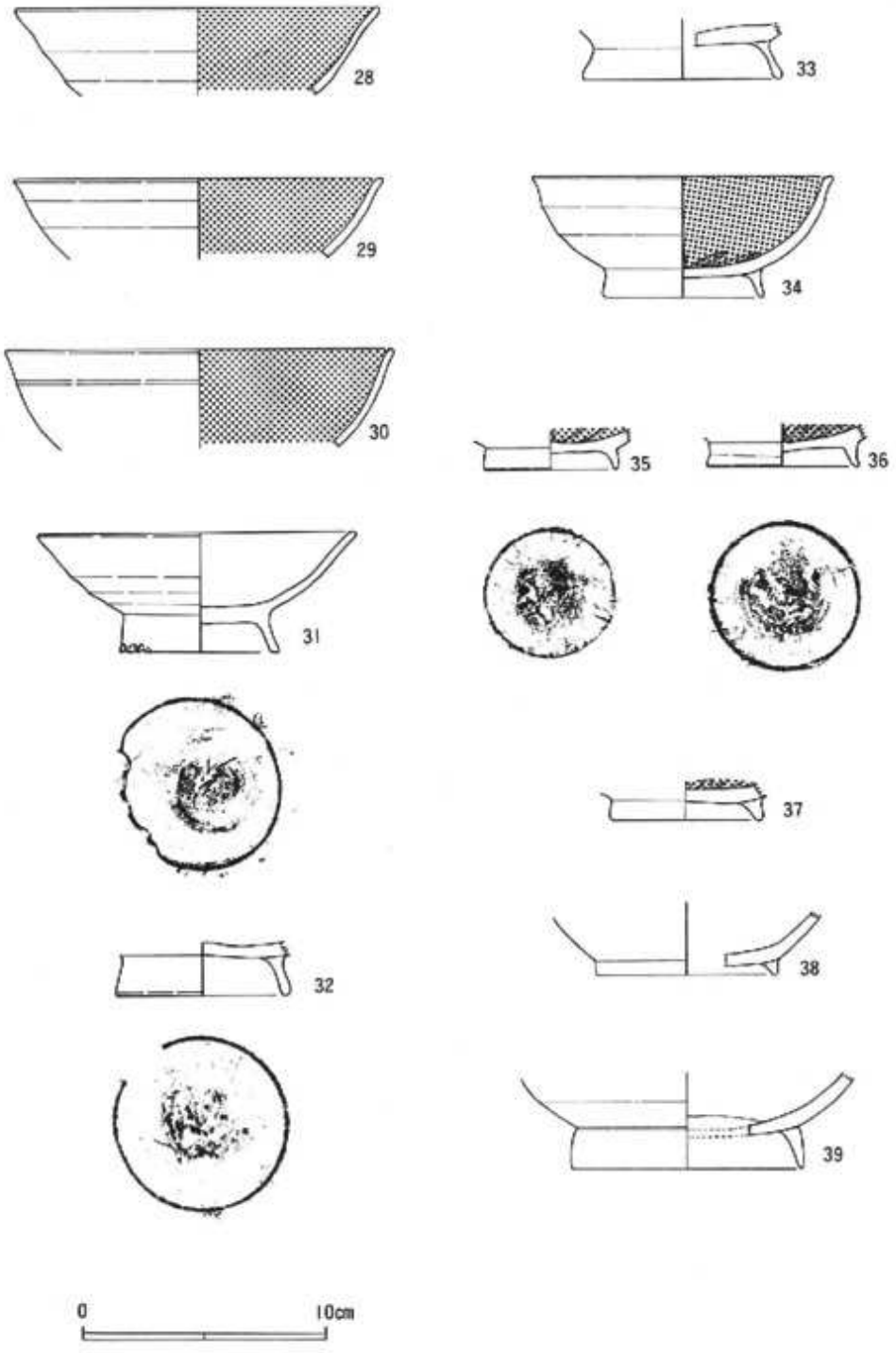
１９～２１は、いずれも口径１５cm以上もある大型坏である。１９は薄手の器壁を有したもので、２０は外面中程に若干の段が観察できる。また、２１はやや深みのある容器で、塊に近い形状とみられる。

２２～３０は内面黒色研磨された土師器坏である。図示したものは、いずれも推定口径１３cm以上を計るもので、黒色処理をしていない坏に比べて全体的にやや大ぶりのものが多いように見受けられた。また、この資料も底部の形状が不明のため、高台付のものもかなり含まれるものと思われる。２２は内面が丁寧にヘラミガキされている。２３は口縁部が肥厚し、内面が丁寧にヘラミガキされたものであるが、その形状からあるいは鉢ともみられる。また、２４も口縁部が全体的に肥厚したもので、やや深めのずんぐりとした形状を呈している。２５は内面黒色研磨され、見込部には円弧状の暗文が認められるもので、２４と同様ずんぐりとしており、塊に近いものとみられる。２６～２９もやや深めの形状を呈し、高台付坏かもしれない。このうち２８はとくに器壁が薄手といえる。また、３０は推定口径１５．７cmを計るもので、器壁が薄手に成形されており、鉢に近い形状が想定される。

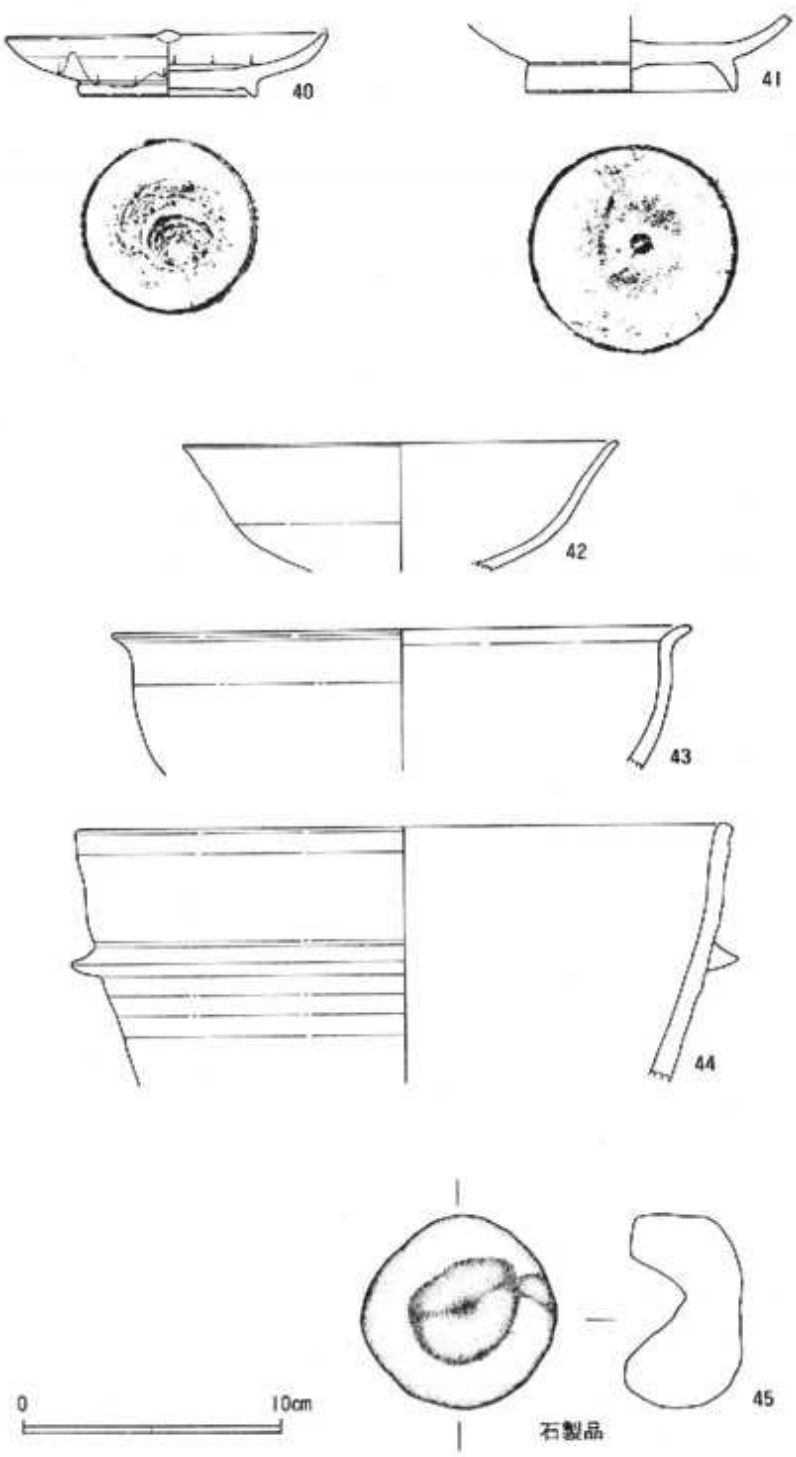
３１～３８は土師器高台付坏である。このうち３１～３３は内面黒色研磨されないもので、３４～３７は内面黒色研磨された坏で、３８は内外面ともに黒色研磨された黒色土器である。３１はほぼ完形を呈するもので、内外面ともにヨコナデが施され、とくに外面にロクロ痕が観察できる。底部は貼り付け高台で、その縁部に丸棒状の圧痕が６箇所認められ、高台部が内側に歪んでいる。なお、本例は高台部が器高に対して高い、いわゆる足高高台付坏である。３２・３３も貼り付け高台で、底部はナデ調整が行われている。本例も足高高台付坏に含めたが、あるいは高台付塊ともみられる。３４も土師器高台付坏で、内面は比較的うすい色調に黒色研磨されている。底部中央にわずかに糸切り痕が残り、その周辺はナデ整形が施されている。また、見込部に花びら状の暗文がある。３５・３６・３７も同様な形状を呈するものとみられる。底部は糸切り後つけ高台で、ともに見込部にそれぞれ放射線状・ループ状・渦巻き状の暗文が施されている。３８の黒色土器は内外面研磨されている。高台裏に炭化物の付着が僅かにみられ、火に関する何かに使用された容器であろうか。いずれにしても、この種の土器はこれのみで特殊な資料といえる。

３９は須恵器の高台付塊とみられるものである。器壁も厚くまた高台部も比較的高い大型塊である。なお、本住居址からは図示しなかったが、須恵器坏とみられる破片が、数片と甕の小破片（内面に青海波文のあるものと、ないものがある。）が８片ほど検出されているだけで、土師器の出土量に比して極端に少ない。

４０・４１は灰釉陶器である。４０は口縁部の四箇所に凹部がある完形の輪花皿で、底部は回転糸切り後、貼り付け高台となっており、高台部の断面は丸味を呈している。釉薬は漬け掛けによるもので、見込部と底部を除いた部分に施されている。また、本製品は重ね焼きで大量生産されたとみられ、造りは比較的粗雑であるが、きわめて硬質・堅緻である。４１は高台付塊とみられる。内外面ともナデ整形がなされ、底部もナデ整形が行われている。いずれも、その形状や製



第11図　第２号住居址（ＳＢ－０２）出土遺物　実測図〈３〉（１：３）



第12図　第２号住居址（ＳＢ－０２）出土遺物　実測図〈４〉（１：３）

法からみて平安時代後半の東濃系製品とみられる資料である。なお、本住居址における灰釉陶器の出土量は、須恵器の量に比べてやや多いことが確認でき、さらに共伴する足高高台付坏とあわせて、本住居址のおよその構築年代が想定されよう。つまり灰釉陶器の年代とほぼ一致するものと考えられる。

42は本住居址出土の唯一点の緑釉陶器である。底部が不明であるが、その形状からおそらく高台付埦とみられる。内外面とも緑釉がかけられており、胎土も精良で、また焼成も良好である。

43は土師器甕であるが、口縁部くの字状に外反している。内外面意識的に黒色処理をしたのか暗茶褐色を呈しており、焼成も良好である。

44は土師器羽釜の口縁部破片である。鍔は比較的小さいが、かなり硬い焼成のため取り付けがしっかりしている。なお、内面に炭化物の付着が部分的に認められ、一部黒褐色を呈している。

瓦

第2号住居址から出土した布目瓦は小破片が7点ある。いずれも覆土中からであり、遺構に伴うものではなかった。なお、7点の内訳は平瓦5点、丸瓦2点であるが、前者には縄目文系3点・平行条線文系2点あり、後者には玉縁のある有段式1点・不明のもの1点がある。これらの古瓦は隣接する信濃国分寺跡で使用されたものであるが、いつの時代にか何らかの理由で本住居址に伴うようになった資料とみられるのである。

石製品

本住居址からは図示した唯1点の石製品が出土したのみであった。直径7．4cm×高さ4．5cmの赤茶褐色をした多孔質安山岩製の平坦部分に穴を穿ったもので、その形状は凹石に近いが用途等については、全く不明である。（川上　元）

第3表　第2号住居址（SB－02）出土遺物一覧表〔土器〕

挿図番号	器種	法量(cm)	残存度	色調 外面	色調 内面	器形の特徴	調整	備考
1	坏(十)	10.1 4.5 3.6	2/3	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	口縁部ややくの字状に外反 器形がゆがむ 器壁全体的に厚手	外面 口縁部ヨコナデ 内外面 ロクロヨコナデ 底部回転糸切り	胎土は小砂粒を含む
2	坏(十)	10.7 4.5 3.0	9/10	灰褐色 (7.5YR6/2)	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	口縁部ややくの字状に外反 表面全体に荒れが著しく、内外面に粒状の突起あり	外面 口縁部ヨコナデ 内外面 ロクロヨコナデ 底部回転糸切り	胎土、焼成ともによし
3	坏(上)	10.8 4.9 3.6	完形	にぶい橙色 (2.5YR6/4)	にぶい橙色 (5YR6/4)	口縁部ややくの字状に外反 器形にゆがみあり	外面 口縁部ヨコナデ 内外面 ロクロヨコナデ 底部回転糸切り	胎土に小砂粒を含む。内面に炭化物付着 灯明皿として使用
4	坏(七)	11.0 4.8 3.0	8/10	明赤褐色 (2.5YR5/6)	橙色 (2.5YR6/8)	口縁部外反 器形ゆがみ 器面荒れている	外面 口縁部ヨコナデ 内外面 ロクロヨコナデ 底部回転糸切り	胎土は砂粒を含む 内面に炭化物付着

第3表　第2号住居址（ＳＢ－０２）出土遺物一覧表〔土器〕

挿図番号	器種	法量 (cm)	残存度	色調 外面	色調 内面	器形の特徴	調整	備考
5	坏（土）	11.1 4.0 3.2	3／4	にぶい橙色 (5YR7/4)	明赤褐色 (5YR5/6)	口縁部外反 器面二次焼成により荒れる	外面 口縁部ヨコナデ 内外面 ロクロヨコナデ 底部回転糸切り	胎土に小砂粒を含み、焼成良好
6	坏（土）	11.2 4.4 3.5	1／2	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	口縁部外反	外面 口縁部ヨコナデ 内外面 ロクロヨコナデ 底部回転糸切り	胎土に細砂粒を含み、焼成良好
7	坏（土）	10.6 4.6 3.0	2／5	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	口縁部やや内湾気味で外反	外面 口縁部ヨコナデ 内外面 ロクロヨコナデ 底部回転糸切り	胎土に細砂粒を含み、焼成良好
8	坏（土）	9.9 — —	1／10	明褐灰色 (7.5YR7/2)	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	口縁部外反	外面 口縁部ヨコナデ 内外面 ロクロヨコナデ	胎土に小砂粒多く含む焼成良好
9	坏（土）	11.2 — —	1／10	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	口縁部外反	外面 口縁部ヨコナデ 内外面 ロクロヨコナデ	胎土に細砂粒含む焼成良好
10	坏（土）	11.3 — —	1／10	明赤褐色 (2.5YR5/6)	にぶい橙色 (5YR7/4)	口縁部肥厚し外反	外面 口縁部ヨコナデ 内外面 ロクロヨコナデ	胎土に小砂粒を含む焼成良好
11	坏（土）	11.6 — —	1／10	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	口縁部外反	外面 口縁部ヨコナデ 内外面 ロクロヨコナデ	小砂粒を含む焼成良好
12	坏（土）	12.0 — —	1／10	にぶい橙色 (5YR7/4)	橙色 (5YR6/6)	口縁部外反	外面 口縁部ヨコナデ 内外面 ロクロヨコナデ	小砂粒を含む焼成良好
13	坏（土）	12.0 — —	1／10	褐灰色 (10YR6/1)	灰黄褐色 (10YR5/2)	口縁部外反	外面 口縁部ヨコナデ 内外面 ロクロヨコナデ	小砂粒を含む焼成良好
14	坏（土）	13.1 — —	1／10	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	灰褐色 (7.5YR5/2)	口縁部やや肥厚し外反 外面に成形時の引きずり痕あり	外面 口縁部ヨコナデ 内外面 ロクロヨコナデ	小砂粒を含む焼成良好
15	坏（土）	13.2 — —	1／10	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	灰黄褐色 (10YR6/2)	口縁部ややくの字状に外反	外面 口縁部ヨコナデ 内外面 ロクロヨコナデ 内面 ヘラミガキ	胎土の粒子細かい焼成良好
16	坏（土）	13.4 — —	1／10	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	灰黄褐色 (10YR5/2)	口縁部外反	外面 口縁部ヨコナデ 内外面 ロクロヨコナデ	粒子細かい焼成良好
17	坏（土）	13.7 — —	1／8	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	口縁部外反	外面 口縁部ヨコナデ 内外面 ロクロヨコナデ	細砂粒を含む焼成良好
18	坏（土）	13.8 — —	1／5	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	器肉厚く直線状に外反	外面 口縁部ヨコナデ 内外面 ロクロヨコナデ	砂粒を含む焼成良好
19	坏（土）	15.0 — —	1／10	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	器肉薄くやや内湾気味に外反	外面 口縁部ヨコナデ 内外面 ロクロヨコナデ	小砂粒を含む焼成良好
20	坏（土）	15.3 — —	1／10	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	にぶい黄橙色 (10YR7/3)	器肉厚手 口縁部外反	外面 口縁部ヨコナデ 内外面 ロクロヨコナデ	小砂粒を含む焼成良好
21	坏（土）	16.2 — —	1／5	にぶい褐色 (7.5YR7/4)	灰褐色 (7.5YR5/2)	口縁部外反	外面 口縁部ヨコナデ 内外面 ロクロヨコナデ 内面 ヘラミガキ	砂粒を含む焼成良好

第3表　第2号住居址（ＳＢ－０２）出土遺物一覧表〔土器〕

挿図番号	器種	法量 (cm)	残存度	色調 外面	色調 内面	器形の特徴	調整	備考
22	坏（土）	13.0 — —	1／10	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	黒色 (N1.5)	口縁部外反	外面　口縁部ヨコナデ 内外面　ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨	小砂粒を含む 焼成良好
23	坏（土）	13.3 — —	1／10	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	黒色 (N1.5)	口縁部肥厚し外反	外面　口縁部ヨコナデ 内外面　ロクロヨコナデ	小砂粒を含む 焼成良好
24	坏（土）	13.5 — —	1／5	明褐灰色 (7.5YR7/2)	黒色 (N1.5)	口縁部肥厚し外反	外面　口縁部ヨコナデ 内外面　ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨	小砂粒を含む 焼成良好
25	坏（土）	13.8 — —	1／5	にぶい橙色 (5YR7/4)	黒色 (N1.5)	口縁部外反	外面　口縁部ヨコナデ 内外面　口縁部ミガキ 見込部に円弧状の暗文	小砂粒を含む 焼成良好
26	坏（土）	14.2 — —	1／8	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	黒色 (N1.5)	口縁部外反	外面　口縁部ヨコナデ 内外面　ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨	小砂粒を多量に含む 焼成良好
27	坏（土）	14.8 — —	1／6	橙色 (7.5YR7/6)	黒色 (N1.5)	口縁部外反	外面　口縁部ヨコナデ 内外面　ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨	小砂粒を多量に含む 焼成良好
28	坏（土）	14.8 — —	1／10	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	黒色 (N1.5)	口縁部外反	外面　口縁部ヨコナデ 内外面　ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨	小砂粒を多量に含む 焼成良好
29	坏（土）	14.9 — —	1／10	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	黒色 (N1.5)	口縁部外反	外面　口縁部ヨコナデ 内外面　ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨	小砂粒を多量に含む 焼成良好
30	坏（土）	15.7 — —	1／10	口縁部黒色 胴部橙色 (5YR6/6)	黒色 (N1.5)	口縁部外反	外面　口縁部ヨコナデ 内外面　ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨	小砂粒を含む 焼成良好
31	坏（土）	13.0 7.3 4.9	ほぼ完形	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	底部は貼り付け高台 高台部に圧痕があり、ゆがみがあり	外面　口縁部ヨコナデ 体部　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り→貼付高台	粘土精良 焼成良好
32	坏（土）	— 7.1 —	1／10 （底部）	にぶい橙色 (5YR7/4)	橙色 (5YR6/6)	底部は貼り付け高台	体部　ロクロヨコナデ 底部　ナデ調整	細砂粒を含む 焼成良好
33	坏（土）	— 8.1 —	1／20 （底部）	にぶい橙色 (5YR7/4)	にぶい橙色 (5YR7/4)	八の字状にひらく高台	体部　ロクロヨコナデ 底部　ナデ調整	細砂粒を含む 焼成良好
34	坏（土）	12.2 6.7 5.0	1／3	にぶい橙色 (5YR7/4)	かなり淡い黒色 (2.5Y2/1)	口縁部くの字状に外反 底部貼り付け高台	外面　口縁部ヨコナデ 体部　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り 内面　黒色研磨、見込部に花びら状暗文	砂粒を含む 焼成良好
35	坏（土）	— 5.5 —	1／5 （底部）	橙色 (7.5YR6/6)	黒色 (N1.5)	底部貼り付け高台	体部　ロクロヨコナデ 底部　回転糸切り 内面　黒色研磨、見込部に放射状の暗文	小砂粒を含む 焼成良好
36	坏（土）	— 6.3 —	1／3 （底部）	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	黒色 (N1.5)	底部貼り付け高台	体部　ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨、見込部にループ状の暗文 底部　ナデ整形	砂粒を含む 焼成良好
37	坏（土）	— 6.2 —	1／8 （底部）	にぶい橙色 (5YR7/4)	黒色 (N1.5)	底部貼り付け高台	体部　ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨、見込部にうず巻状暗文	細砂粒を含む 焼成良好

第３表　第２号住居址（ＳＢ－０２）出土遺物一覧表〔土器〕

挿図番号	器種	法量 (cm)	残存度	色調 外面	色調 内面	器形の特徴	調整	備考
38	坏（土）	— 7.4 —	1／6（底部）	黒色 (N1.5)	黒色 (N1.5)	内外面黒色処理	内外面 ヘラ整形 底部 ナデ調形	胎土精良 焼成良好
39	塊（須）	— 9.5 —	1／10（底部）	灰色 (5Y6/1)	灰色 (5Y6/1)	器肉厚手 高台高い	体面 ロクロヨコナデ	胎土精良 焼成良好
40	皿（灰釉）	12.4 6.3 2.3	完形	灰白色 (7.5Y7/1)	灰白色 (7.5Y7/1)	底部貼り付け高台	外面 口縁部ヨコナデ 体部 ロクロヨコナデ 底部 回転糸切り ナデ整形	体部の内外面に漬け掛けによる淡緑色の釉
41	塊（灰釉）	… 8.0 —	1／3（底部）	灰白色 (2.5Y7/1)	灰白色 (2.5Y7/1)	器肉厚手大型底部貼り付け高台	体部 ロクロヨコナデ	胎土は精良
42	塊（緑釉）	— 16.8 —	1／5	黄緑色	黄緑色	口縁部外反	外面 口縁部ヨコナデ 体部 ロクロヨコナデ	胎土は精良
43	甕（土）	22.2 — —	1／6	黒褐色 (10YR3/1)	黒褐色 (10YR3/1)	口縁部くの字状に外反	外面 口縁部ヨコナデ 内外面 ナデ	胎土に石粒（石英等）を含む 焼成良好
44	羽釜（土）	25.1 … —	1／6	橙色 (5YR7/6)	にぶい橙色 (5YR7/6)	鍔部貼りつけ	外面 口縁部ヨコナデ 体部 ロクロヨコナデ	胎土に細粒を含み焼成堅緻

３．グリッド内出土土器

調査地区内の各グリッドより出土した平安時代までの土器はあわせて51点である。いずれも礫や河原石の集石群中に混入して出土したり、その下層の土層中より出土している。出土遺物はほとんどが小破片であり、図上で復元して示した。

１．２．３は土師器坏である。１は体部が外反し、焼成はやや不良である。２は内面に黒色研磨が施されている。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部で大きく外反する。４．５は土師器坏の底部である。共に内面が黒色研磨されており、底部に貼り付け高台を有する。

６は灰釉陶器の皿である。胎土は精良で内外面に淡緑色の施釉が行われている。７はＢ－３グリッド出土の須恵器蓋のつまみ部分である。宝珠形を呈している。８は土師器の甕である。外面は橙色を呈し、口縁部がくの字状に外反している。９は土師器坏で、内外面ともに黒色の土器である。内面は黒色研磨され、体部に放射状暗文が施されている。

10は土師器坏で、内面が黒色研磨されている。坏の体部は内湾気味に外反している。11は灰釉陶器の塊である。胎土は精良で、体部の内外面に漬け掛けによる釉が施されている。12は灰釉陶器の塊で、底部に貼り付け高台を有する。11．12は共にＣ－２グリッド内から出土しており、11世紀代の東濃系灰釉陶器とみられる。１３は土師器坏で、内面は丁寧な黒色研磨が行われている。底部には貼り付け高台を有し、右回転の糸切り痕が残る。

14は灰釉陶器の皿である。体部の内面中位に段を有している。全体の仕上げは粗雑で、体部の内外面に漬け掛けによる釉が施されている。15は土師器の坏で、内面が黒色研磨されている。底

部はやや粗雑な仕上げ方で、右回転の糸切り痕が残る。16は須恵器の坏で、底部に貼り付け高台を有する。底部は切り離した後に、回転ヘラケズリが行われている。

17は須恵器の坏である。底部は平底で盤状の形態をしている。18は須恵器の鉢で、体部外面に格子目状の叩き痕が残る。19は土師器の坏で、底部に右回転の糸切り痕が残る。内外面ともに仕上げは粗雑である。20は土師器の坏で、内面に黒色研磨が施されている。胎土には長石、砂粒を多く含んでいる。21．22は土師器の坏で、共に内面は黒色研磨されている。

23は土師器の甕で、口縁部はくの字状に外反している。24は土師器の坏である。胎土には小砂粒を多く含む。25は土師器の坏で、内面は黒色研磨されている。26は土師器の甕である。口辺部は内湾気味に外反し、外面に煤が附着している。27は土師器の坏である。体部は内湾気味に外反し、底部に右回転の糸切り痕が残る。28は土師器の坏である。底部、胴部の仕上げは粗雑で、底部に右回転の糸切り痕が残る。29は土師器の坏である。

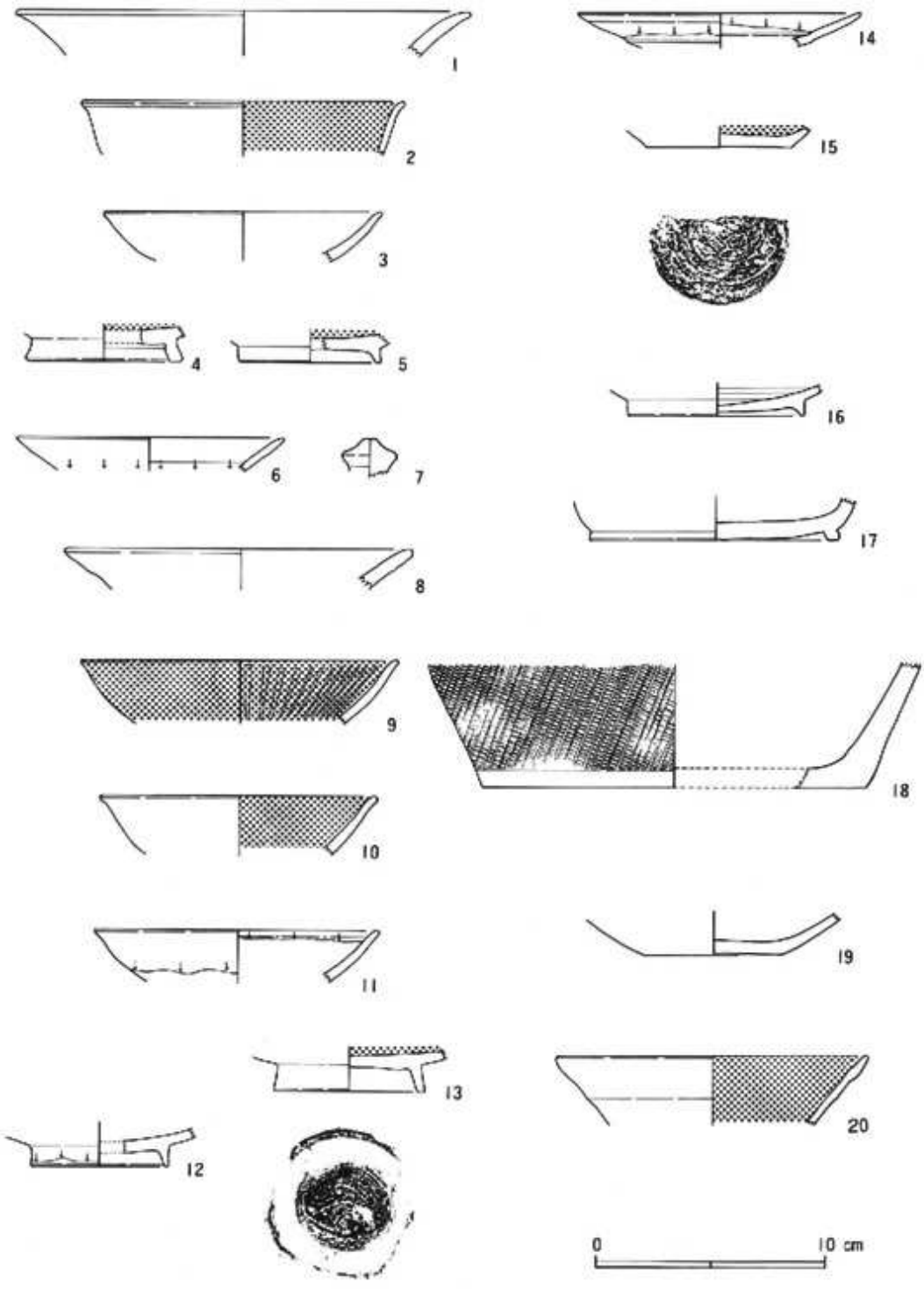
30.31.32.33 は土師器の坏で、いずれも内面は黒色研磨されている。34は土師器の坏である。35は土師器の坏で、内面は黒色研磨されている。底部に右回転の糸切り痕が残る。36は土師器の坏で、体部は内湾気味に外反し、内面は黒色研磨されている。37は土師器の坏で、底部に貼り付け高台を有する。内面は黒色研磨され、中心から放射状にヘラ磨き痕が残る。38は弥生時代後期の箱清水式土器の甕の破片である。口縁部から頸部にかけて櫛描波状文が施されている。

39は土師器の坏である。内面は黒色研磨され、見込部に放射状暗文が施されている。40は土師器の坏で、底部には貼り付け高台を有している。内面は黒色研磨され、見込部には放射状暗文が施されている。41は灰釉陶器の皿である。胎土は精良で内外面にわずかに施釉がなされている。42は灰釉陶器の椀である。底部に貼り付け高台を有し、右回転の糸切り痕が残る。胎土は精良で、内外面にわずかに施釉されている。

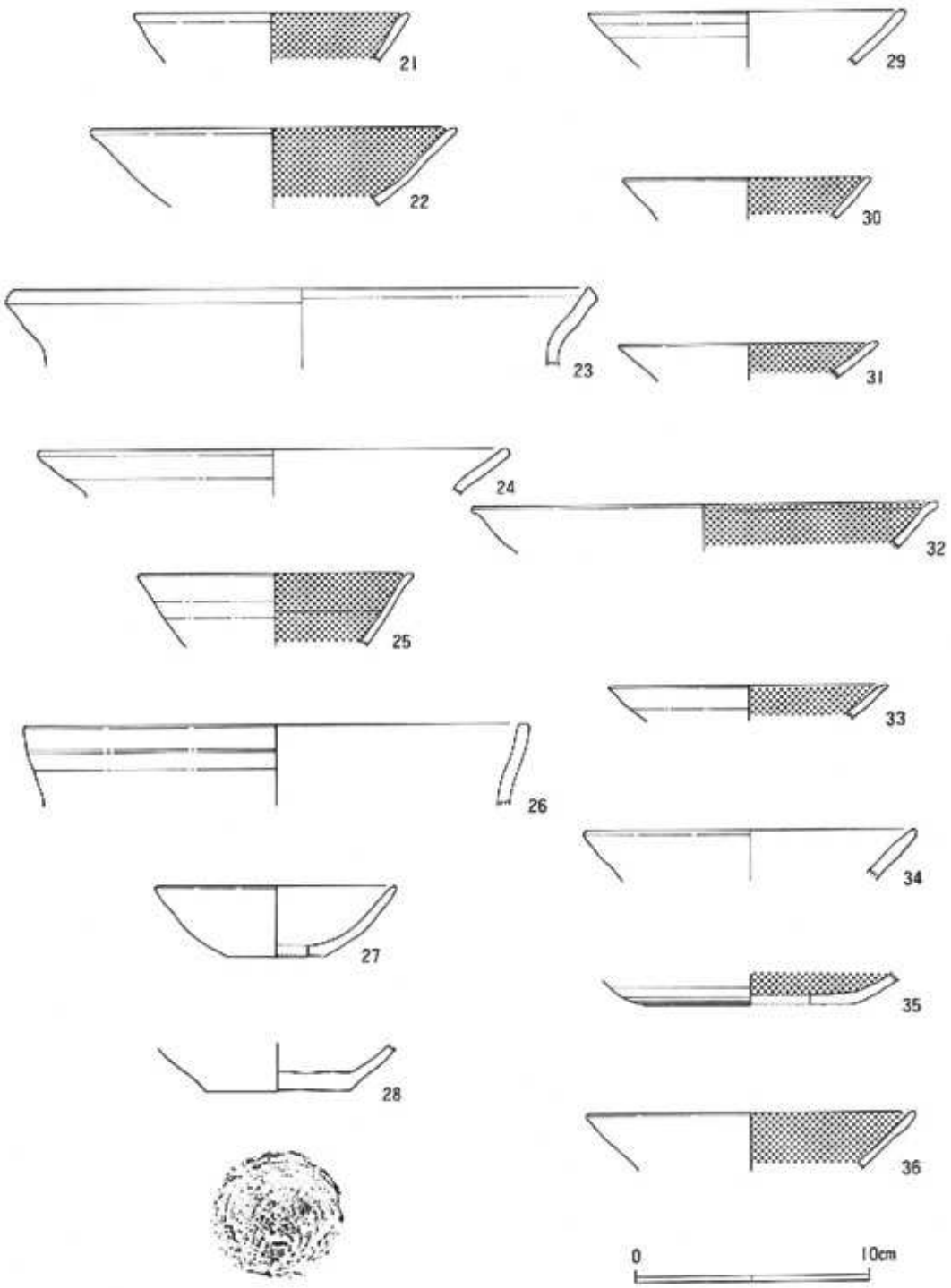
43は土師器の坏で、底部に貼り付け高台を有する。内外面が黒色の土器で、内面の黒色研磨は磨滅が著しい。44は土師器の坏である。底部は貼り付け高台で、底部の切り離し後にヘラナデが行われている。体部内面は黒色研磨され、見込部に放射状暗文が施されている。45は土師器の皿である。

46はG－2グリッドから出土した灰釉陶器の椀で、口縁部は内湾気味に外反している。体部の内外面に漬け掛けによる淡緑色の釉が施されている。47はG－3グリッドから出土した灰釉陶器の椀で、底部に右回転の糸切り痕が残る。底部の貼り付け高台はやや粗雑な仕上げであり、体部の内外面に漬け掛けによる施釉がなされている。46.47 は共に11世紀代の東濃系灰釉陶器と推定される。

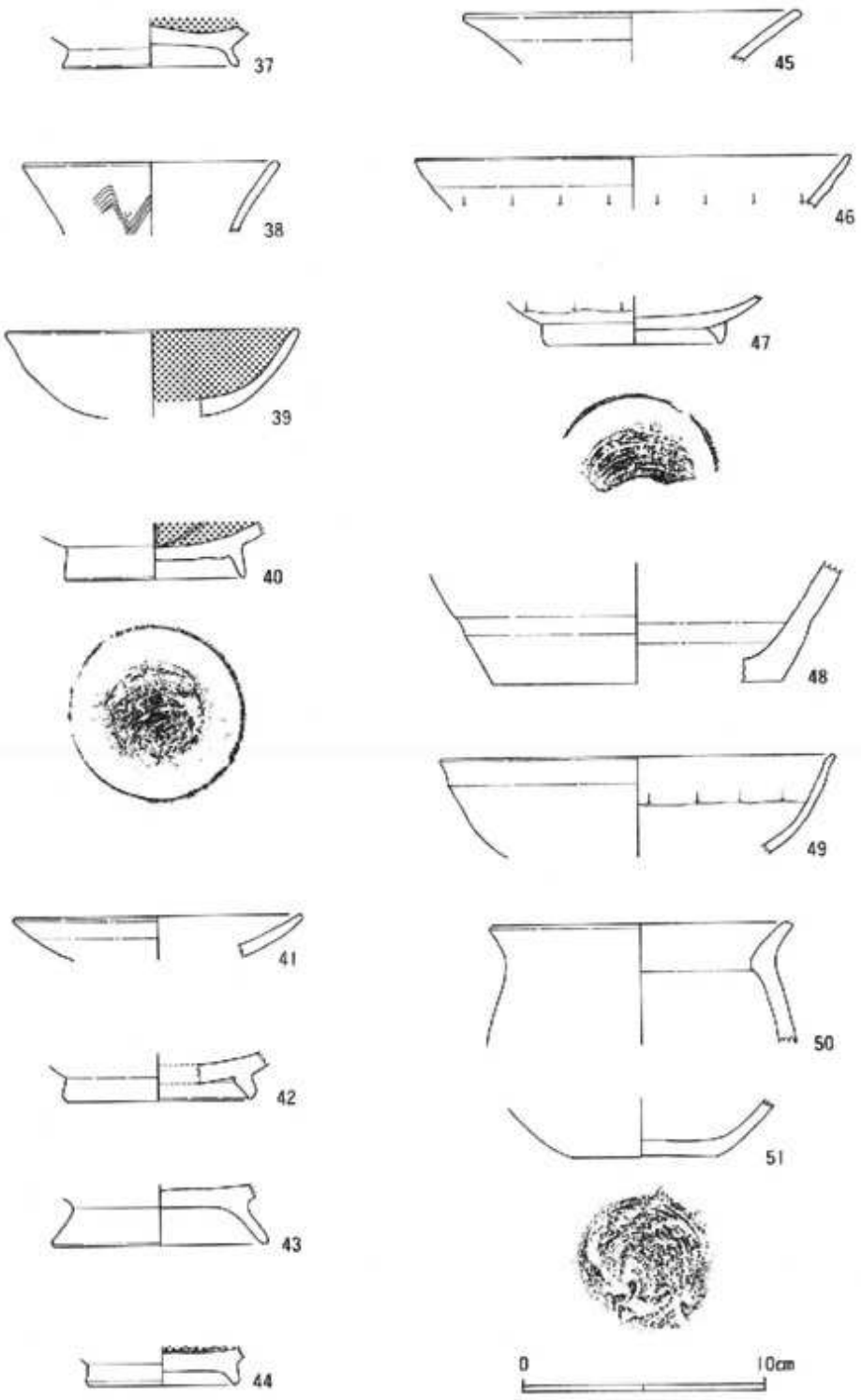
48は須恵器の鉢である。底部、胴部の仕上げは粗雑である。49はH－3グリッドから出土した灰釉陶器の椀である。体部の内外面に漬け掛けによる淡緑色の釉が施されており、11世紀代の東濃系の灰釉陶器とみられる。50は土師器の甕である。外面はにぶい赤褐色を呈し、口縁部はくの字状に外反している。51は須恵器の坏で、体部は外反し底部は平底である。この底部の整形はやや粗雑で、回転糸切り痕が残る。（倉沢正幸）



第13図　グリッド内出土土器　実測図〈1〉（1：3）



第14図　グリッド内出土土器　実測図〈2〉（1：3）



第15図　グリッド内出土土器　実測図〈3〉（1：3）

第4表　グリッド内出土遺物一覧表〔土器〕

挿図番号	器種〔出土G〕	法量(cm)	残存度	色調 外面	色調 内面	器形の特徴	調整	備考
1	坏(土)〔B-2〕	20.1 — —	1/6	にぶい黄橙色(10YR7/4)	にぶい橙色(7.5YR7/4)	体部外反 口縁部外反	外面　口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ 内面　口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ	胎土は小砂粒を含む
2	坏(土)〔B-2〕	14.2 — —	1/6	にぶい橙色(7.5YR7/4)	黒色(N1.5)	体部内湾気味に外反 口縁部外反	外面　口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨	胎土は小砂粒を多く含む
3	坏(土)〔B-2〕	12.2 — —	1/6	にぶい橙色(5YR6/3)	にぶい橙色(5YR6/4)	体部外反	外面　口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ 内面　口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ	胎土は砂粒を多く含む
4	坏(土)〔B-2〕	— 7.0 —	1/4 (底部)	明赤褐色(5YR5/6)	黒色(N1.5)	底部貼り付け高台	外面　体部ロクロヨコナデ　底部切り離し後、回転ヘラケズリ 内面　黒色研磨	胎土は小砂粒を含む
5	坏(土)〔B-2〕	— 6.3 —	1/3 (底部)	橙色(5YR6/6)	黒色(N1.5)	底部貼り付け高台	外面　体部ロクロヨコナデ　底部切り離し後、回転ヘラケズリ 内面　黒色研磨	胎土は小砂粒を含む
6	皿(灰釉)〔B-2〕	11.8 — —	1/7	灰白色(2.5Y8/1)	明オリーブ灰色(2.5GY7/1)	体部外反	内外面に淡緑色の施釉がなされる	胎土は精良
7	蓋つまみ(須)〔B-3〕	つまみ部径 2.4	完	灰黄褐色(10YR5/2)		宝珠形を呈す	外面　体部ロクロヨコナデ	胎土は小砂粒を含む
8	甕(土)〔B-4〕	15.4 — —	1/6	橙色(5YR6/6)	にぶい橙色(5YR6/4)	口縁部はくの字状に外反	外面　口縁部ヨコナデ 体部ヘラナデ 内面　口縁部ヨコナデ 体部ヘラナデ	胎土は小砂粒を含む
9	坏(土)〔C-2〕	14.1 — —	1/5	黒色(10YR1.7/1)	黒色(N1.5)	体部外反 口縁部やや外反	外面　口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨 体部に放射状暗文	胎土は小砂粒を含む 内外面ともに黒色
10	坏(土)〔C-2〕	12.2 — —	1/7	にぶい橙色(5YR6/4)	黒色(N1.5)	体部内湾気味に外反 口縁部外反	外面　口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨	胎土は小砂粒を含む
11	壺(灰釉)〔C-2〕	12.6 — —	1/6	灰白色(10YR7/1)	灰黄色(2.5Y7/2)	体部外反 口縁部外反	外面　口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ 内面　体部ロクロヨコナデ	胎土は精良 体部の内外面に漬け掛けによる釉
12	壺(灰釉)〔C-2〕	— 6.1 —	1/6 (底部)	灰白色(10YR7/1)	灰黄色(2.5Y7/2)	底部貼り付け高台	内外面に淡緑色の施釉がなされる	胎土は精良

第4表　グリッド内出土遺物一覧表〔土器〕

挿図番号	器種（出土G）	法量（cm）	残存度	色調 外面	色調 内面	器形の特徴	調整	備考
13	坏（土）（C-4）	— 6.7 —	ほぼ完 （底部）	にぶい橙色（7.5YR6/4）	黒色（N1.5）	底部貼り付け高台	外面　体部ロクロヨコナデ　底部　回転糸切り（ロクロ右回転） 内面　丁寧な黒色研磨	胎土は小砂粒を含む
14	皿（灰釉）（D-3）	12.4 — —	1／6	灰白色（2.5Y7/1）	灰黄色（2.5Y7/2）	体部は外反内面中位に段を有する。仕上げは粗雑	外面　口縁部ヨコナデ　体部ロクロヨコナデ 内面　体部ロクロヨコナデ	胎土は精良体部の内外面に漬け掛けによる釉
15	坏（土）（D-6）	— 6.4 —	1／2 （底部）	にぶい赤褐色（5YR4/3）	黒色（N1.5）	底部はやや粗雑な仕上げ	外面　体部ロクロヨコナデ　底部回転糸切り（ロクロ右回転） 内面　黒色研磨	胎土は砂粒を多く含む
16	坏（須）（D-6）	— 7.7 —	1／5	灰オリーブ色（5Y6/2）	灰黄色（2.5Y6/2）	底部貼り付け高台	外面　体部ロクロヨコナデ　底部切り離し後、全面回転ヘラケズリ 内面　体部ロクロヨコナデ	胎土は小砂粒を含む
17	坏（須）（D-6）	— 11.0 —	1／5 （底部）	暗オリーブ灰色（2.5GY4/1）	オリーブ灰色（2.5GY5/1）	体部外反底部は平底で盤状の形態	外面　体部ロクロヨコナデ　底部　切り離し後全面回転ヘラケズリ 内面　体部ロクロヨコナデ	胎土は砂粒を含む
18	鉢（須）（D-6）	— 17.0 —	1／2 （底部）	オリーブ黒（5Y3/1）	灰色（5Y4/1）	体部は外反	外面　体部には格子目状の叩き痕 内面　ヘラナデ	胎土は砂粒を含む
19	坏（土）（E-2）	— 5.4 —	1／2 （底部）	にぶい橙色（7.5YR6/4）	にぶい橙色（7.5YR7/4）	体部外反内外面ともに仕上げは粗雑	外面　体部ロクロヨコナデ　底部　回転糸切り（ロクロ右回転） 内面　体部ロクロヨコナデ	胎土は小砂粒を含む焼成ややや不良
20	坏（土）（E-2）	13.6 — —	1／6	にぶい褐色（7.5YR5/3）	黒色（N1.5）	体部外反	外面　口縁部ヨコナデ　体部ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨	胎土は長石、砂粒を多く含む
21	坏（土）（E-2）	11.8 — —	1／7	にぶい赤褐色（5YR5/4）	黒色（N1.5）	体部外反口縁部やや外反	外面　口縁部ヨコナデ　体部ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨	胎土は砂粒を含む
22	坏（土）（E-2）	15.8 — —	1／4	口縁部黒色胴部にぶい赤褐色（5YR5/3）	黒色（N1.5）	体部内湾気味に外反　口縁部外反	外面　口縁部ヨコナデ　体部ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨	胎土は砂粒を含む
23	甕（土）（E-2）	25.6 — —	1／8	灰褐色（7.5YR4/2）	黒褐色（5YR2/1）	口縁部はくの字状に外反	外面　口縁部ヨコナデ　体部ロクロヨコナデ 内面　体部ロクロヨコナデ	胎土は小砂粒を含む
24	坏（土）（E-2）	20.4 — —	1／6	にぶい赤褐色（5YR5/4）	にぶい橙色（7.5YR6/4）	体部外反	外面　口縁部ヨコナデ　体部ロクロヨコナデ 内面　口縁部ヨコナデ　体部ロクロヨコナデ	胎土は小砂粒を含む
25	坏（土）（E-2）	11.8 — —	1／5	明赤褐色（5YR5/8）	黒色（N1.5）	体部外反	外面　口縁部ヨコナデ　体部ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨	胎土は小砂粒を含む

第4表　グリッド内出土遺物一覧表〔土器〕

挿図番号	器種〔出土G〕	法量(cm)	残存度	色調 外面	色調 内面	器形の特徴	調整	備考
26	甕〔上〕〔E-3〕	22.0 — —	1／6	にぶい橙色(7.5YR6/4)	にぶい褐色(7.5YR6/3)	口辺部内湾気味に外反	外面　口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ 内面　口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ	胎土は小砂粒を含む。外面に煤が附着
27	坏〔上〕〔E-4〕	10.4 — —	1／4	にぶい橙色(5YR6/4)	にぶい橙色(5YR7/4)	体部内湾気味に外反	外面　口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ 底部回転糸切り （ロクロ右回転） 内面体部ロクロヨコナデ	胎土は砂粒、金雲母を含む
28	坏〔十〕〔E-4〕	— 6.3 —	完 （底部）	灰褐色(7.5YR5/2)	黒褐色(10YR3/1)	体部外反 底部、胴部の仕上げは粗雑	外面　胴部ロクロヨコナデ。底部回転糸切り （ロクロ右回転） 内面体部ロクロヨコナデ	胎土は砂粒を含む
29	坏〔十〕〔E-4〕	13.6 — —	1／6	赤褐色(10R5/4)	にぶい橙色(5YR6/4)	口辺部外反	外面　口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ 内面　口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ	胎土は砂粒を含む
30	坏〔十〕〔E-5〕	10.7 — —	1／6	にぶい橙色(7.5YR7/3)	黒色(N1.5)	口辺部外反	外面　口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨	胎土は小砂粒を含む
31	坏〔上〕〔F-2〕	11.2 — —	1／8	口辺部黒色 胴部にぶい赤褐色(5YR5/4)	黒色(N1.5)	口辺部外反	外面　口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨	胎土は小砂粒を含む 外面に煤が附着
32	坏〔上〕〔F-2〕	20.2 — —	1／6	橙色(5YR6/6)	黒色(N1.5)	口辺部外反 口縁部大きく外反	外面　口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨	胎土は小砂粒を含む
33	坏〔上〕〔F-2〕	12.0 — —	1／6	にぶい橙色(5YR6/4)	口辺部 灰褐色(7.5YR6/2) 胴部黒色	口辺部外反 口縁部やや外反	外面　口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨 （口辺部は磨滅して黒色がとれる）	胎土は小砂粒を含む
34	坏〔十〕〔F-2〕	14.4 — —	1／6	橙色(5YR6/6)	にぶい橙色(5YR6/4)	口辺部外反 口縁部やや外反	外面　口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ 内面　口縁部ヨコナデ 胴部ロクロヨコナデ	胎土は小砂粒を含む
35	坏〔上〕〔F-2〕	— 8.8 —	1／6	にぶい橙色(5YR7/4)	黒色(N1.5)	体部外反 胴部のつくりはやや粗雑	外面　胴部ロクロヨコナデ　底部回転糸切り （ロクロ右回転） 内面　黒色研磨	胎土は小砂粒を含む
36	坏〔上〕〔F-2〕	14.2 — —	1／6	橙色(5YR6/6)	黒色(N1.5)	体部内湾気味に外反	外面　口縁部ヨコナデ 体部ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨	胎土は小砂粒を含む
37	坏〔十〕〔F-2〕	— 7.3 —	完 （底部）	橙色(5YR6/6)	黒色(N1.5)	底部貼り付け高台	外面　体部ロクロヨコナデ　底面切り離し後全面回転ヘラケズリ 内面　黒色研磨、中心から放射状にヘラ磨き痕	胎土は小砂粒を含む
38	甕 弥生 〔F-2〕	10.6 — —	1／6	にぶい赤褐色(5YR4/4	黒褐色(5YR3/1)	口辺部外反	外面　口縁部ヨコナデ 口縁部から頸部に櫛描波状文 内面　口縁部ヨコナデ 頸部ヘラナデ	胎土は小砂粒を含む

第4表　グリッド内出土遺物一覧表〔土器〕

挿図番号	器種〔出土G〕	法量(cm)	残存度	色調 外面	色調 内面	器形の特徴	調整	備考
39	坏(十)〔F-3〕	12.2 — —	1/5	にぶい褐色(7.5YR6/3)	黒色(N1.5)	体部内湾気味に外反	外面　口縁部ヨコナデ　体部ロクロヨコナデ 内面　黒色研磨　見込部に放射状暗文	胎土は小砂粒を含む
40	坏(土)〔F-3〕	— 7.4 —	完(底部)	にぶい橙色(5YR7/4)	黒色(N1.5)	底部は貼り付け高台　体部外反	外面　体部ロクロヨコナデ　底部は切り離し後回転ヘラケズリ 内面　黒色研磨、見込部に放射状暗文が10本	胎土は小砂粒を含む
41	皿灰釉〔F-5〕	12.0 — —	1/7	にぶい黄橙色(10YR7/3)	にぶい黄橙色(10YR7/2)	体部外反	内外面にわずかに施釉	胎土は精良
42	塊灰釉〔F-5〕	— 8.0 —	1/2(底部)	にぶい黄橙色(10YR7/2)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	底部貼り付け高台	外面　体部ロクロヨコナデ　底部回転糸切り(ロクロ右回転) 内面　体部ロクロヨコナデ	胎土は精良、内面にわずか施釉
43	坏(土)〔G-2〕	— 9.0 —	完(底部)	黒色(N1.5)	黒色(N1.5)	底部貼り付け高台　底部の仕上げは粗雑	外面　ロクロヨコナデ　底部切り離し後回転ヘラケズリ 内面　黒色研磨されているが磨滅が著しい	胎土は小砂粒を含む
44	坏(土)〔G-2〕	— 6.2 —	完(底部)	浅黄橙色(10YR8/4)	黒色(N1.5)	底部貼り付け高台	外面　体部ロクロヨコナデ　底部切り離し後ヘラナデ 内面　黒色研磨、見込部に放射状暗文が9本	胎土は小砂粒を含む。焼成がやや不良
45	皿(十)〔G-2〕	14.0 — —	1/6	浅黄橙色(7.5YR8/6)	にぶい橙色(5YR7/4)	口辺部外反	外面　口縁部ヨコナデ　体部ロクロヨコナデ 内面　口縁部ヨコナデ　体部ロクロヨコナデ	胎土は小砂粒を含む
46	塊灰釉〔G-2〕	18.0 — —	1/8	灰白色(5Y7/1)	明オリーブ灰色(2.5GY7/1)	口縁部内湾気味に外反	外面　口縁部ヨコナデ　体部ロクロヨコナデ 内面　口縁部ヨコナデ　体部ロクロヨコナデ	胎土は精良、体部の内外面に漬け掛けによる淡緑色の釉
47	塊灰釉〔G-3〕	— 7.2 —	1/2(底部)	にぶい黄橙色(10YR7/3)	にぶい黄橙色(10YR6/3)	底部は貼り付け高台でやや粗雑な仕上げ	外面　体部ロクロヨコナデ底部回転糸切り(ロクロ右回転) 内面　ロクロヨコナデ	胎土は精良体部の内外面に漬け掛けによる釉
48	鉢(細)〔G-6〕	— 12.0 —	1/4(底部)	黒色(N2)	暗青灰色(10BG3/1)	体部外反、底部、胴部の仕上げは粗雑	外面　ヘラナデ 内面　ロクロヨコナデ　ヘラナデ	胎土は砂粒を含む
49	塊灰釉〔H-3〕	16.4 — —	1/5	灰白色(5Y7/1)	灰白色(5Y7/2)	口辺部外反　口縁部やや外反	外面　口縁部ヨコナデ　体部ロクロヨコナデ 内面　ロクロヨコナデ	胎土は精良、体部の内外面に漬け掛けによる淡緑色の釉
50	甕(七)〔H-3〕	12.6 — —	1/5	にぶい赤褐色(5YR5/4)	暗赤褐色(5YR3/4)	口縁部はくの字状に外反	外面　口縁部ヨコナデ　胴部ヘラケズリ 内面　口縁部ヨコナデ　胴部横位のヘラケズリ	胎土は小砂粒、黒雲母を多量に含む

第4表　グリッド内出土遺物一覧表〔土器〕

挿図番号	器種〔出土G〕	法量(cm)	残存度	色調 外面	色調 内面	器形の特徴	調整	備考
51	坏(須)〔II-3〕	… 5.6 —	完 (底部)	暗灰色(N3/1)	灰色(N4/1)	体部は外反し底部平底。 底部の整形はやや粗雑	外面　体部ロクロヨコナデ 底部回転糸切り 内面　ロクロヨコナデ	胎土は小砂粒を含む

4．中世、近世の出土土器

中世から近世にかけての遺物とみられる資料は、内耳土器を含めて24点が出土した。内耳土器については次節で扱うこととし、以下8点の資料をみてみたい。

1は青磁碗である。口辺部は内湾して外反している。体部の外面は緑灰色に施釉されている。2は白磁碗で、体部は内湾気味に外反している。体部の内外面に黄色味を帯びた白色の施釉がなされている。1、2共に江戸時代前半の製品とみられる。

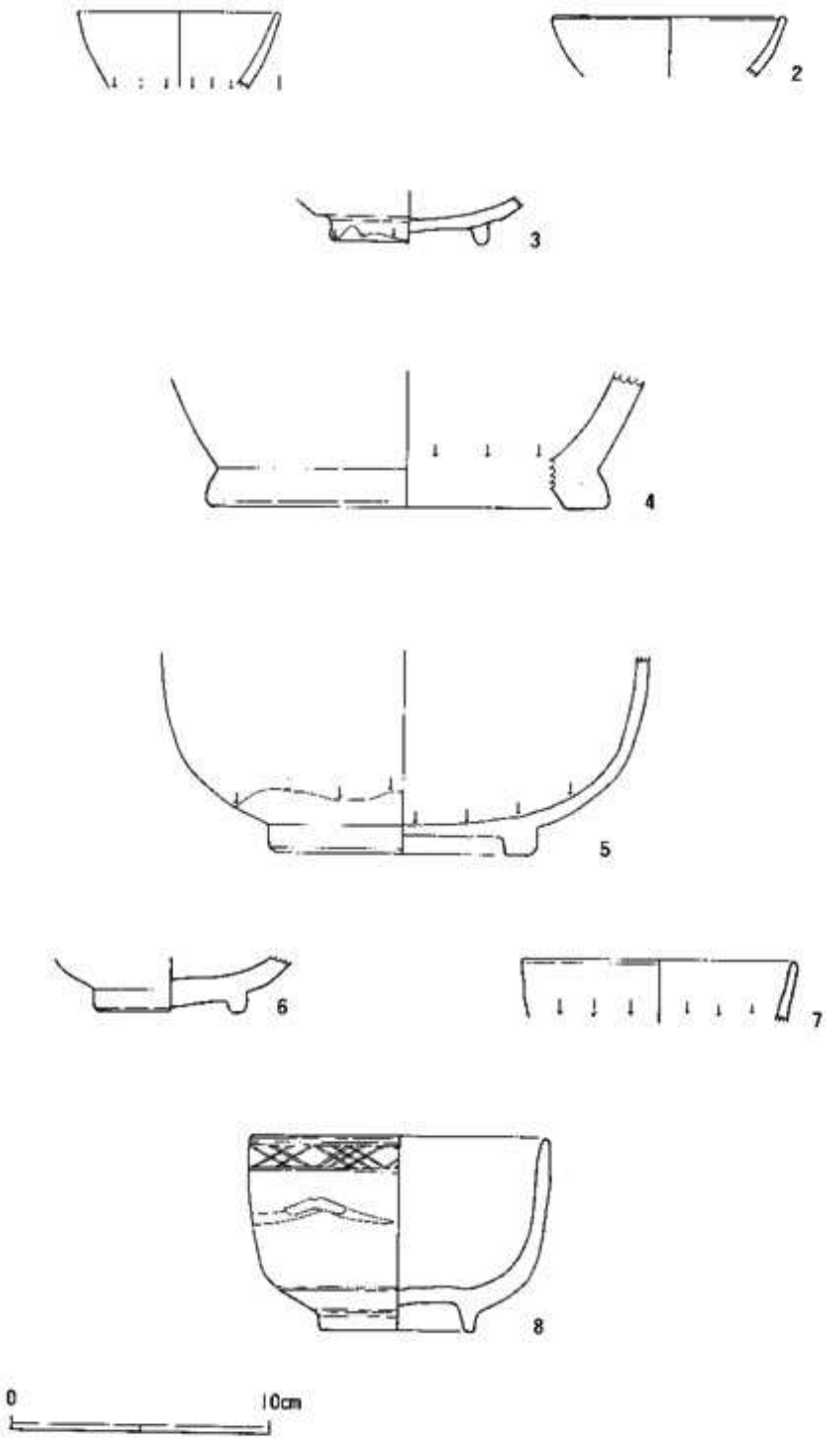
3は美濃灰釉の碗である。体部は内湾気味に外反し、底部に削り出しによる高台を有する。体部の内外面に淡緑色の施釉がなされている。4は美濃灰釉の鉢で、体部は外反している。体部内面には淡緑色の釉が施されている。3、4共に15～16世紀代の製品とみられる。

5は陶器の鉢である。体部は内湾して外反し、底部に削り出しによる高台を有する。体部内面に青味を帯びた白色の釉が施されている。18～19世紀代に比定される。6は瀬戸灰釉とみられる碗である。体部は外反し、底部は削り出し高台を有する。胎土は精良で、淡黄色の施釉がなされている。15～16世紀代の製品とみられる。

7は白磁の碗で、体部の内外面に黄色味を帯びた白色の施釉が行われている。江戸時代前半の製品と推定される。8は染付碗である。体部は内湾気味に外反し、底部に削り出しによる高台を有する。体部の内外面に無色の釉が厚めに施されている。外面に薄い藍色で格子状と山形の文様が描き出されている。18～19世紀代の製品とみられる。

第5表　中世，近世の出土土器一覧表

挿図番号	器種〔出土G〕	法量(cm)	残存度	色調 外面	色調 内面	器形の特徴	調整	備考
1	碗(青磁)〔H-3〕	7.8 — —	1/6	緑灰色(7.5GY6/1)	オリーブ灰色(5GY6/1)	口辺部内湾して外反	緑灰色に施釉されている	胎土は精良
2	碗(白磁)〔F-3〕	8.7 — —	1/6	灰白色(7.5Y8/1)	灰白色(2.5Y8/2)	体部は内湾気味に外反	内外面に黄色味をおびた白色の施釉がなされている	胎土は精良
3	碗(美濃灰釉)〔F-2〕	— 6.2 —	1/2 (底部)	明緑灰色(7.5GY8/1)	明オリーブ灰色(5GY7/1)	体部内湾気味に外反、削り出しによる高台を有する	内外面に淡緑色の施釉がなされている	胎土は精良



第16図　中世. 近世の出土土器実測図（1 : 3）

第5表　中世，近世の出土土器一覧表

挿図番号	器種（出土G）	法量（cm）	残存度	色調 外面	色調 内面	器形の特徴	調整	備考
4	鉢（美濃 灰釉）（F-5）	— 15.7 —	1／6 （底部）	灰白色 (2.5Y8/1)	灰白色 (10Y7/2)	体部外反 底部貼り付け高台	内外面に施釉 内面体部には淡緑色の釉がほどこされる	胎土は精良
5	鉢（陶器）（C-5）	— 10.4 —	完 （底部）	胴部灰白色 (2.5GY8/1)	緑灰色 (5G6/1)	体部は内湾して外反、削り出しによる高台を有する	外面　体部ロクロヨコナデ、底部は回転ヘラケズリ 内面　施釉	胎土は砂粒を多く含む釉は青味をおびた白色釉
6	碗（瀬戸 灰釉）（H-3）	— 5.8 —	1／3 （底部）	淡黄色 (2.5Y8/3)	明黄褐色 (2.5Y7/6)	体部外反 底部の高台は削り出し	外面　体部ロクロヨコナデ，底部回転糸切り（ロクロ右回転） 内面　淡黄色の施釉がなされる	胎土は精良、体部の内外面に施釉
7	碗（白磁）（H-3）	10.8 — —	1／6	浅黄色 (2.5Y7/4)	浅黄色 (2.5Y7/4)	体部内湾気味に外反	内外面に黄色味を帯びた白色の施釉がなされる	胎土は精良
8	壺（染付）（E-3）	11.5 5.2 7.1	1／2	灰色 (10Y6/1)	オリーブ灰色 (10Y6/2)	体部は内湾気味に外反、削り出しによる高台を有する	内外面に無色の釉、外面に薄い藍色の文様を描く	胎土は精良

5．内耳土器

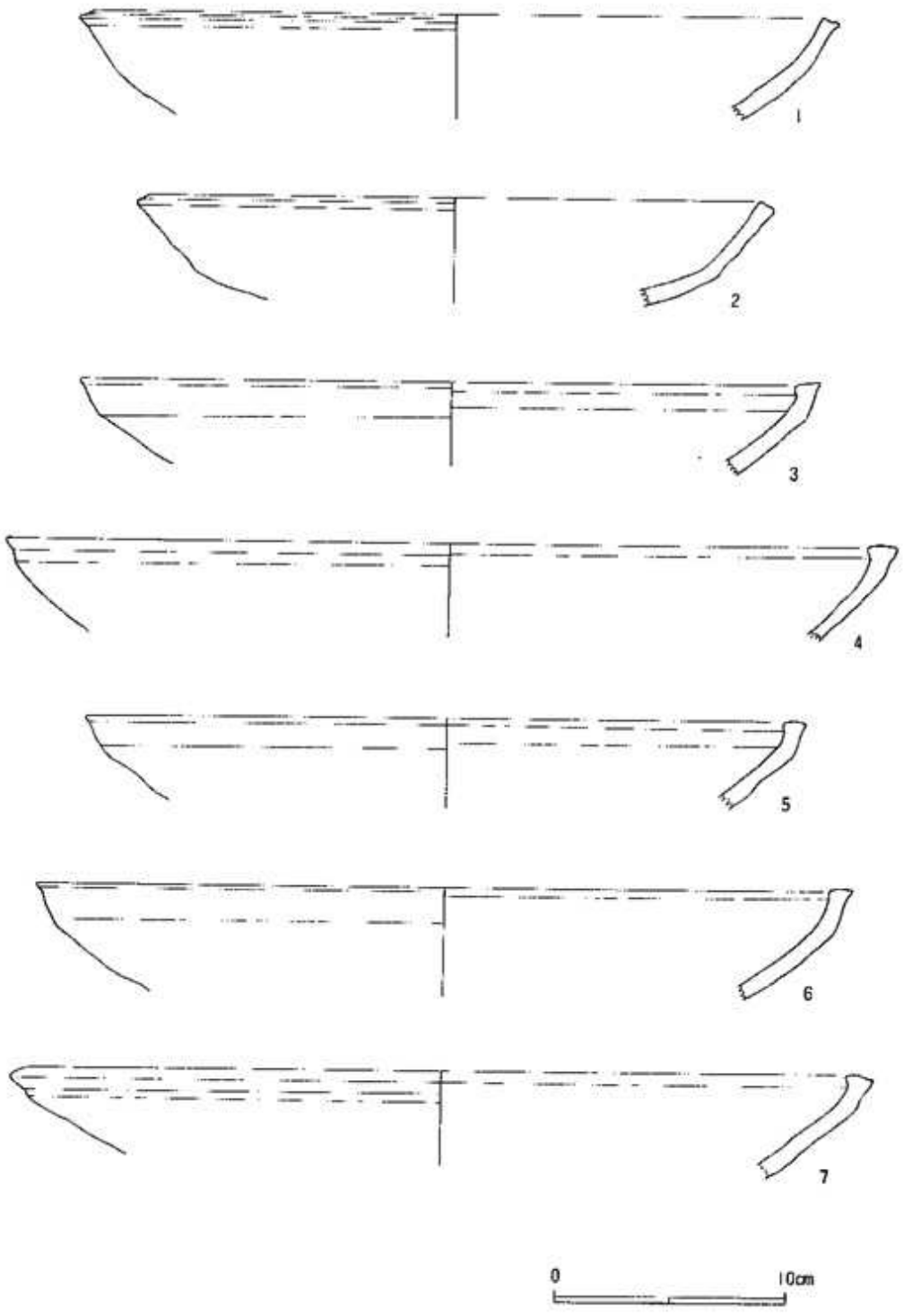
調査地区から出土した内耳土器は16点で、いずれも破片である。これらの内耳土器は器高の低い、いわゆる「ほうろく型」とみられる内耳土器である。内耳土器の出土は、B－3、C－5、E－2、E－5、F－2、G－2、G－6の各グリッドからみられた。特にC－5グリッドから8点の出土が確認され、この地点から集中して出土している。この出土層位は、礫が多量に混入した土層を剥いだ黒褐色土層中であり、附近からは寛永通宝1点や18～19世紀頃とみられる陶器の鉢が出土している。

1～7の内耳土器片は、すべて胴部の外面がヘラケズリ調整されている。胴部の内面はヘラナデやヘラ磨きが行われている。胎土は小砂粒を含み、5を除いていずれも外面に黒色の煤が附着している。

8は耳部と底部が残存している内耳土器である。土器の法量は推定口径が32.4cm、推定底径が22.6cm、器高は 4.9cmである。体部は外反し、胴部はヘラケズリ調整されている。胴部の表面は凹凸がみられ、粗雑な仕上げとなっている。体部内側には、縦位に耳部が付けられている。この耳部は口縁端部から1㎜下より接続している。土器内面の見込部は丁寧なヘラ磨きが施されている。胎土は小砂粒を含み、外面に煤が附着している。

9は耳部が付いた内耳土器片である。胴部外面はヘラケズリ調整が行われ、煤が附着している。内面の見込部はヘラ磨きが施されている。10.12 は内耳土器片で、共に胴部がヘラケズリ調整されている。

11.13.14.15 は、いずれも内側に耳部が付けられた内耳土器片である。これらはすべて外面に煤が附着している。胴部外面はヘラケズリ調整され、内面はヘラナデ調整されている。13は口縁



第17図　内耳土器実測図〈1〉（1：3）

端部よりすぐに耳部が接続している。11は口縁端部より 1.5cm下より、14は 5 mm下より、15は 4 mm下より、それぞれ耳部が接続している。

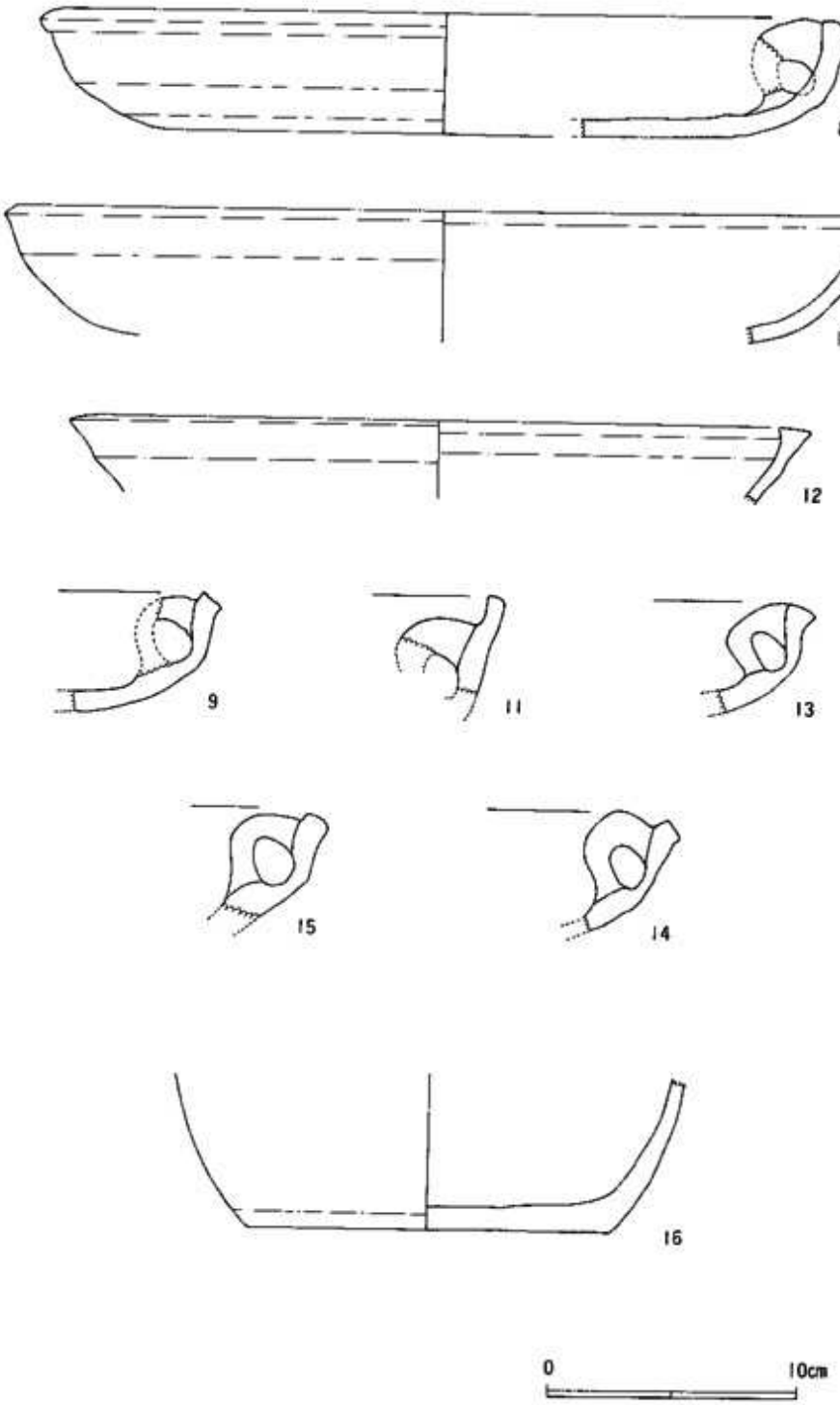
16は内耳土器の底部で、上記のほうろく型土器とは異なり、器高の高いものである。胴部はヘラケズリ調整され、器壁は内湾するカーブを描きながら立ち上がっている。その器形から15～16世紀代のものと推定される。

内耳土器については、小林秀夫氏が茅野市御社宮司遺跡の報告書（『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書－茅野市その５－昭和57年、長野県教育委員会発行』）において、編年的な検討を行っている。小林氏はそのなかで、15世紀、16世紀代をⅠ～Ⅴに区分し、さらに17世紀以降のほうろく型の内耳土器を区分している。県内では近世以降のほうろく型の内耳土器としては岡谷市御頭屋敷遺跡、長野市川中沖遺跡の出土例が知られている。

本調査地区から出土した16を除く器高の低い内耳土器もこのほうろく型の内耳土器に分類される。前述したようにC－5グリッド出土のほうろく型の内耳土器片は寛永通宝や18～19世紀代に比定される陶器の鉢と共に出土している。また他グリッド出土の内耳土器片も比較的上層から出土しており、これらのほうろく型の内耳土器は18世紀以降の、江戸時代後半以降に使用されたものと考えられる。

第６表　内耳土器一覧表

挿図番号	器種〔出土G〕	法量(cm)	残存度	色調 外面	色調 内面	器形の特徴	調整	備考
1	内耳土器〔B-3〕	32.8 — —	1/4	口縁部黒色 胴部暗褐色 (7.5YR3/3)	にぶい褐色 (7.5YR6/3)	体部外反、胴部中央でゆるやかな稜をもつ	外面　口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ 内面　口縁部ヨコナデ 胴部丁寧なヘラ磨き	胎土は砂粒を多く含む 外面に煤が附着
2	内耳土器〔C-5〕	27.6 — —	1/6	口縁部～胴部上半黒色 胴部下半にぶい褐色 (7.5YR5/3)	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	口縁部やや外反、体部外反、胴部の外面は粗雑な仕上げ	外面　口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ 内面　口縁部ヨコナデ 胴部ヘラ磨き	胎土は小砂粒を含む 外面に煤が附着
3	内耳土器〔C-5〕	31.8 — —	1/6	口縁部黒色 胴部暗褐色 (10YR3/3)	灰褐色 (7.5YR4/2)	体部外反 胴部上半にゆるやかな稜をもつ	外面　口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ 内部　口縁部ヨコナデ 胴部横位のヘラ磨き	胎土は小砂粒を多く含む　口縁部に煤が附着
4	内耳土器〔C-5〕	38.0 — —	1/6	灰褐色 (5YR5/2)	にぶい褐色 (7.5YR5/3)	口縁部やや外反、体部外反	外面　口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ 内面　口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	胎土は小砂粒を含む 口縁部に煤が附着
5	内耳土器〔C-5〕	31.2 — —	1/8	灰黄褐色 (10YR6/2)	黄灰色 (2.5Y5/1)	体部外反、胴部上半にゆるやかな稜をもつ	外面　口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ 内面　口縁部ヨコナデ 胴部ヘラ磨き	胎土は小砂粒を含む
6	内耳土器〔C-5〕	34.9 — —	1/4	黒褐色 (10YR3/1)	にぶい褐色 (7.5YR5/4)	体部外反、胴部の外面は粗雑な仕上げ	外面　口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ 内面　口縁部ヨコナデ 胴部丁寧なヘラ磨き	胎土は小砂粒を含む 外面に煤が附着



第18図　内耳土器実測図〈2〉（1：3）

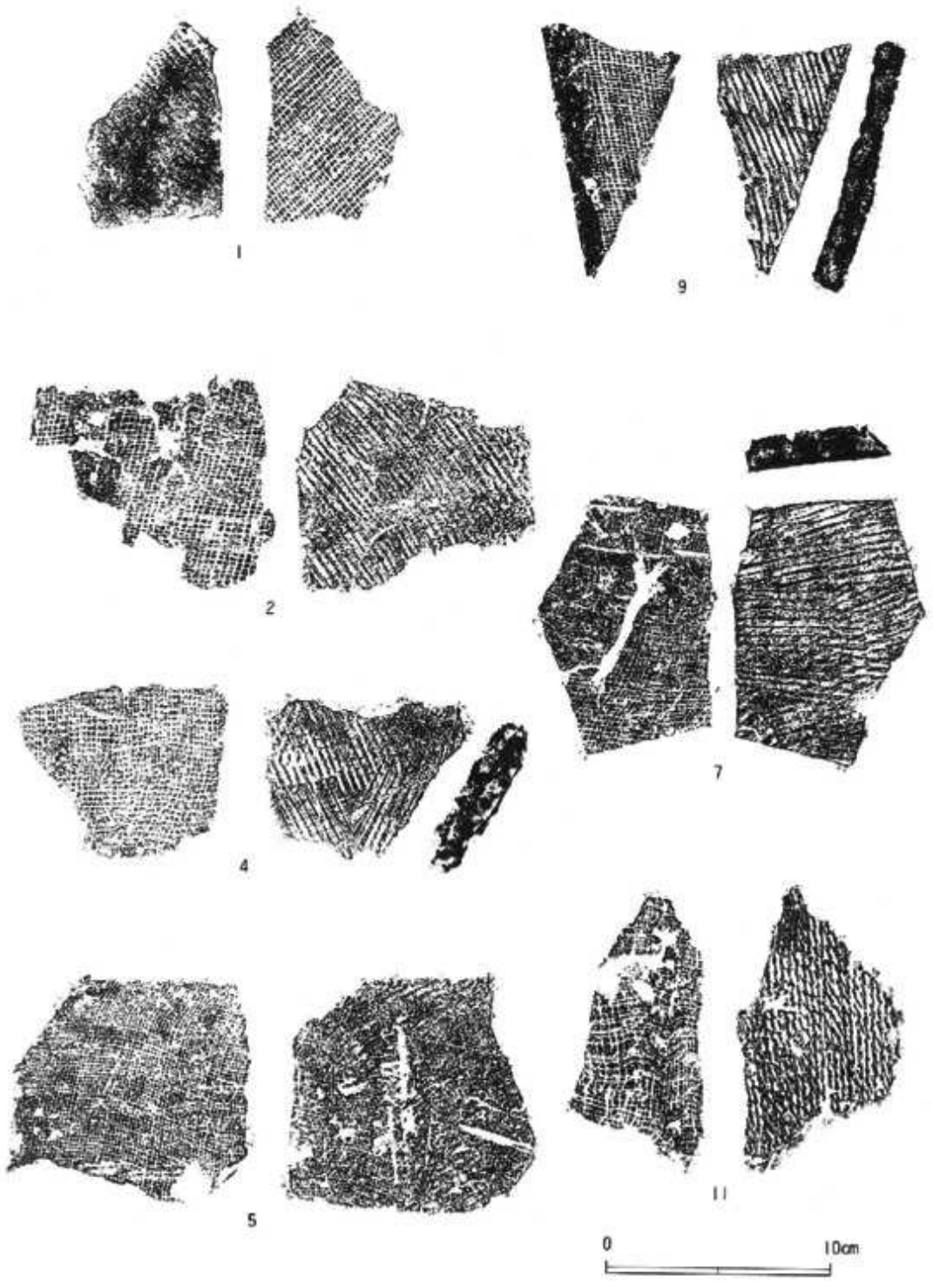
第6表　内耳土器一覧表

挿図番号	器種〔出土G〕	法量(cm)	残存度	色調 外面	色調 内面	器形の特徴	調整	備考
7	内耳土器(上)〔C-5〕	37.1 — —	1/4	暗赤褐色(5YR3/2)	暗褐色(7.5YR3/3)	体部外反、胴部の外面は粗雑な仕上げ	外面　口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ 内面　口縁部ヨコナデ 胴部丁寧なヘラ磨き	胎土は小砂粒を含む 外面に煤が附着
8	内耳土器(上)〔C-5〕	32.4 22.6 4.9	1/4	口縁部黒色 胴部から底部にぶい赤褐色(2.5YR4/4)	赤褐色(10R4/3)	体部外反、胴部の外面は凹凸があり粗雑な仕上げ 内側に耳部が縦位につく	外面　口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ 内面　口縁部ヨコナデ 見込部は丁寧なヘラ磨き	胎土は小砂粒を多く含む 口縁部に煤が附着
9	内耳土器(上)〔E-2〕	— — 4.2	1/6	口辺部黒色 胴部黒褐色(10YR3/1)	にぶい褐色(7.5YR5/3)	体部外反 内側に耳部が縦位につく	外面　口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ 内面　口縁部ヨコナデ 見込部はヘラ磨き	胎土は砂粒を含む 外面に煤が附着
10	内耳上器(土)〔E-5〕	35.1 — —	1/4	灰黄褐色(10YR5/2)	にぶい黄橙色(10YR6/3)	体部内湾気味に外反、胴部の外面は粗雑な仕上げ	外面　口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ 内面　口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	胎土は小砂粒を含む 外面に煤が附着
11	内耳上器(土)〔F-2〕	— — —	1/6	黒褐色(10YR3/1)	灰褐色(7.5YR4/2)	体部外反、内側に耳部が縦位につく	外面　口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ 内面　口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	胎土は小砂粒を含む 外面に煤が附着
12	内耳上器(土)〔G-6〕	29.8 —	1/8	にぶい赤褐色(2.5YR5/4)	明赤褐色(2.5YR5/6)	口縁部やや外反、体部外反	外面　口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ 内面　口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	胎土は小砂粒、黒雲母を含む
13	内耳上器(土)〔G-2〕	— — —	1/6	口辺部黒色 胴部灰黄褐色(10YR5/2)	灰黄褐色(10YR6/2)	体部外反、内側に耳部が縦位につく	外面　口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ 内面　口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	胎土は小砂粒を含む 外面に煤が附着
14	内耳土器(土)〔G-2〕	— — —	1/6	黒褐色(10YR3/1)	にぶい黄橙色(10YR6/4)	体部外反、内側に耳部が縦位につく	外面　口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ 内面　口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ、耳部に縦方向の刷毛目	胎土は小砂粒を含む 外面に煤が附着
15	内耳上器(土)〔G-2〕	— — —	1/8	黒褐色(10YR2/2)	にぶい橙色(7.5YR6/4)	体部外反、内側に耳部が縦位につく	外面　口縁部ヨコナデ 胴部ヘラケズリ 内面　口縁部ヨコナデ 胴部ヘラナデ	胎土は小砂粒を含む 外面に煤が附着
16	内耳上器(土)〔G-5〕	— 14.6 —	1/2(底部)	にぶい赤褐色(5YR5/3)	明灰褐色(7.5YR7/2)	器壁は内湾するカーブを描きながら立ち上がる	外面　胴部、底部ヘラケズリ後ナデ 内面　体部ヘラナデ	胎土は小砂粒を多く含む

6．布目瓦

住居址を除いた調査地区から出土した布目瓦は、あわせて38点である。このうち平瓦が34点、丸瓦が4点出土し、いずれも小破片であった。文様が施された軒平瓦、軒丸瓦の出土は皆無であった。調査地のほぼ全域から瓦の出土がみられたが、特に調査地区東端のB－2、B－3、B－4グリッドから20点の瓦片が出土した。出土層位は上層から下層までほぼ満遍なく出土しているが、ことにB－3、B－4グリッドでは、拳大の礫や河原石に混入して上層から出土する場合が

第19図　布目瓦拓影図〈1〉（1：3）



みられた。

平瓦は凸面の整形叩き文様から縄目文の叩き痕をもつ瓦、格子文の叩き痕をもつ瓦、平行条線文の叩き痕をもつ瓦の3種類が出土した。縄目文の瓦は12点が出土しており、そのうち叩き板に巻き付ける縄に右撚りの縄を使用しているものが8点、左撚りの縄を用いているものが4点であった。

E－4グリッドから出土した縄目文の平瓦（第21図26）は、その叩き痕から6本前後の縄を縦長に巻き付けた叩き板で整形したことが窺える。また、叩き板から縄が遊離するのを防ぐために、途中を細紐で横に縛った痕跡が認められる。

格子文の叩き痕の瓦は11点が出土している。また平行条線文の叩き痕の瓦は3点が出土している。その他凸面の整形が不明なものは8点である。いずれの瓦も凹面は布目痕が残り、端部はケズリ調整されている。

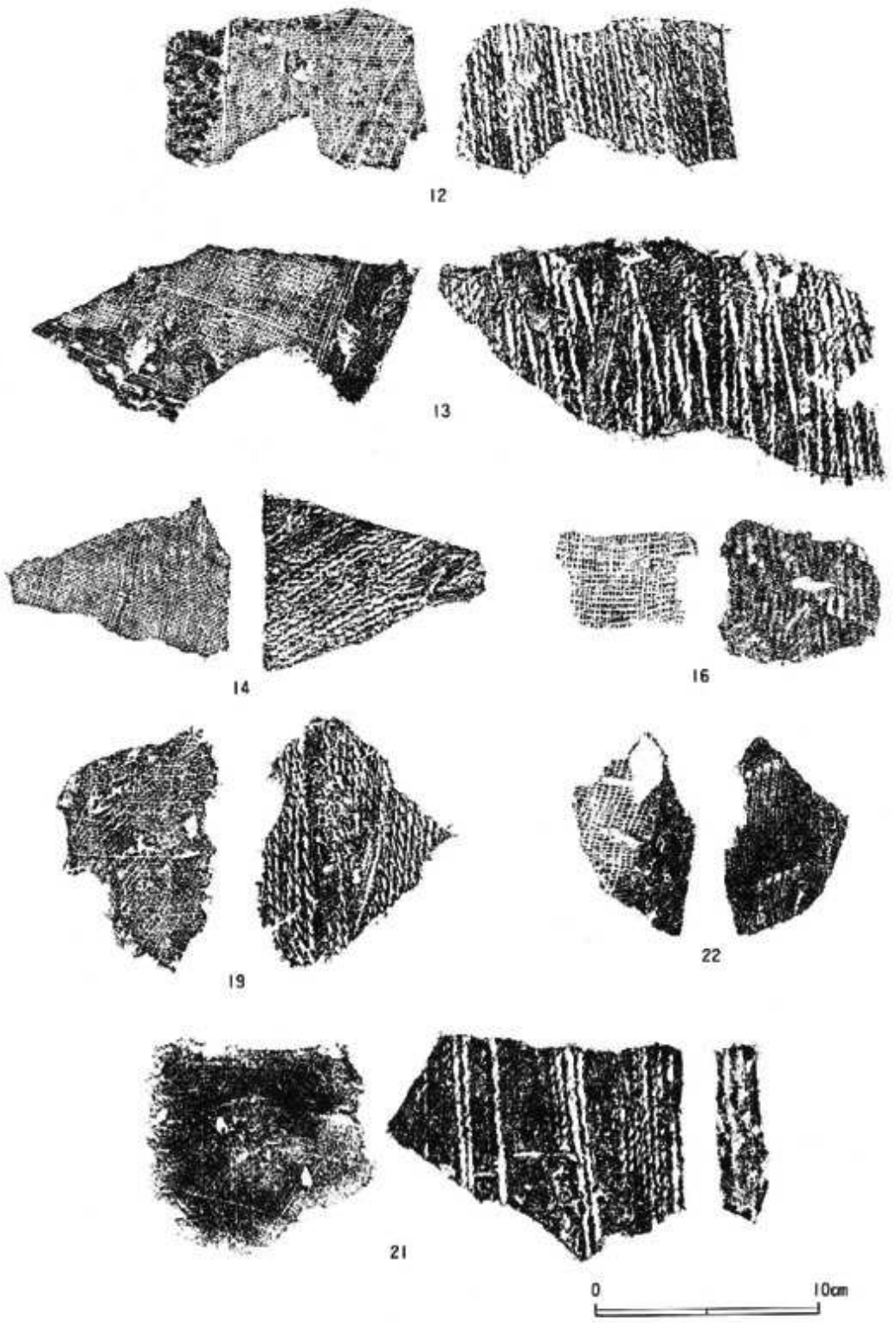
丸瓦は4点が出土している。凸面はナデが行われており、凹面は布目痕が残っている。37、38の丸瓦は、共に玉縁部分の破片と考えられる。出土した38点の瓦のうち、酸化焔焼成の瓦が20点、還元焔焼成の瓦が18点を占め、ほぼ半分ずつに分かれている。これらの小瓦片はすべて凹面に布目痕をもち、奈良時代の信濃国分寺創建時の瓦片から平安時代初期の補修用瓦片までが、混在していると考えられる。

（倉沢正幸）

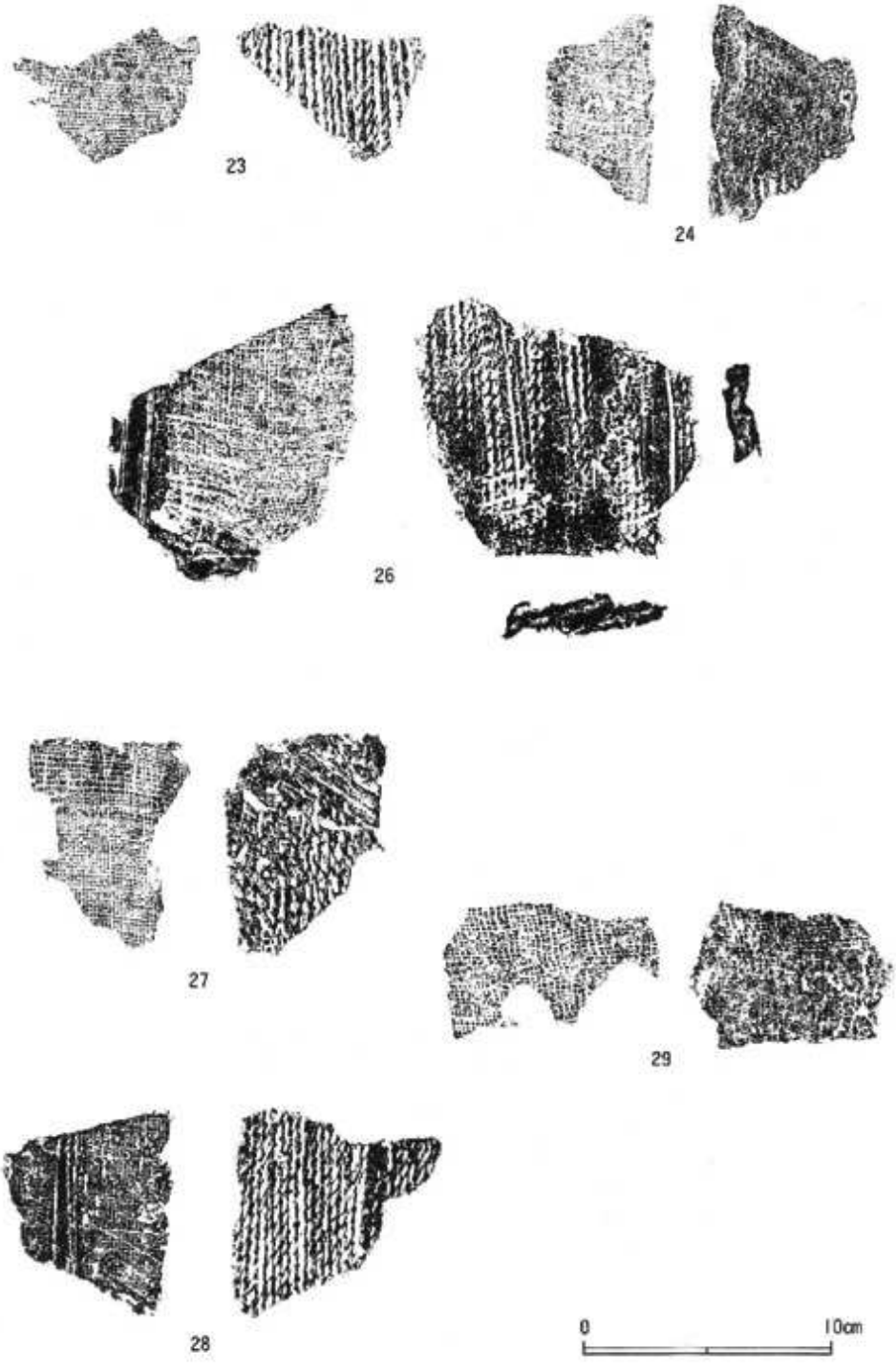
第7表　布目瓦一覧表

挿図番号	器種	法量（cm） 最大幅	厚	出土G	色調 凹面	凸面	器形の特徴、調整	備考
1	平瓦	9.9	2.0	A-4	暗緑灰色 (5G4/1)	赤褐色 (10R5/3)	凸面 格子文の叩き痕、施文後に一部磨り消し 凹面 布目痕	胎土は砂粒を含む 酸化焔焼成
2	平瓦	13.2	2.4	A-4	灰色 (N 5)	灰色 (N 4)	凸面 格子文の叩き痕、施文後に一部磨り消し 凹面 粗い布目痕	胎土は砂粒を含む 還元焔焼成
3	平瓦	10.3	2.5	B-2	灰白色 (2.5Y7/1)	灰白色 (10YR7/1)	凸面 磨滅が顕著 凹面 布目痕端部はケズリ調整	胎土は砂粒を多く含む 還元焔焼成
4	平瓦	8.6	2.0	B-2	にぶい橙色 (5YR6/3)	赤灰色 (2.5YR4/1)	凸面 格子文の叩き痕 凹面 布目痕端部はケズリ調整	胎土は小砂粒を含む 酸化焔焼成
5	平瓦	10.4	1.9	B-2	黄灰色 (2.5Y4/1)	灰色 (N 4)	凸面 叩き痕と一部布目痕が残る 凹面 布目痕端部はケズリ調整	胎土は砂粒を含む 還元焔焼成
6	平瓦	11.5	2.0	B-3	黒褐色 (10YR3/1)	暗灰色 (N 3)	凸面 平行条線文の叩き痕 凹面 布目痕 端部はケズリ調整	胎土は小砂粒を含む 還元焔焼成
7	平瓦	12.1	1.8	B-3	黒褐色 (10YR3/1)	暗灰色 (N 3)	凸面 平行条線文の叩き痕 凹面 布目痕 端部はケズリ調整	胎土は小砂粒を含む 還元焔焼成
8	平瓦	7.2	2.2	B-4	にぶい橙色 (5YR6/4)	褐灰色 (10YR6/1)	凸面 格子文の叩き痕 凹面 粗い布目痕 端部はケズリ調整	胎土は砂粒を含む 酸化焔焼成
9	平瓦	11.3	2.1	B-4	にぶい橙色 (5YR6/4)	橙色 (5YR6/6)	凸面 表面部欠損 凹面 布目痕	胎土は小砂粒を含む 酸化焔焼成

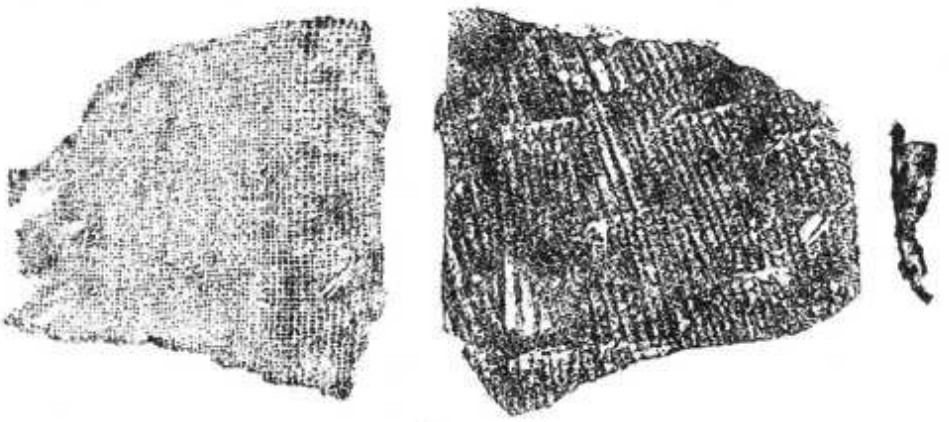
第20図　布目瓦拓影図〈2〉（1：3）



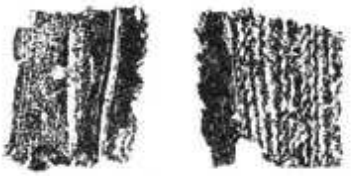
第21図　布目瓦拓影図〈3〉（1：3）



第22図　布目瓦拓影図〈4〉（1：3）

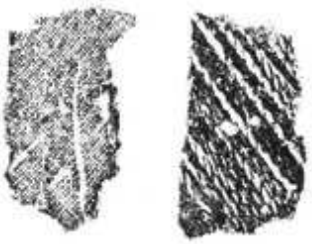


30

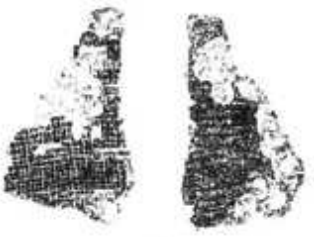


31

32



33



34

0　10cm

第7表　布目瓦一覧表

挿図番号	器種	法量(cm) 最大幅	器厚	出土G	色調 凹面	色調 凸面	器形の特徴、調整	備考
10	平瓦	7.4	1.8	B-4	にぶい橙色 (7/5YR6/4)	褐灰色 (5YR5/1)	凸面　磨滅が顕著 凹面　布目痕	胎土は砂粒を含む 酸化焔焼成
11	平瓦	13.3	2.0	B-4	にぶい橙色 (5YR6/4)	灰褐色 (5YR6/2)	凸面　縄目文の叩き痕、縄は左撚り使用 凹面　布目痕	胎土は砂粒を多く含む 酸化焔焼成
12	平瓦	12.3	1.8	B-4	褐灰色 (10YR6/1)	明褐灰色 (7.5YR7/1)	凸面　縄目文の叩き痕、縄は左撚り使用 凹面　布目痕端部はケズリ調整	胎土は砂粒を含む 還元焔焼成
13	平瓦	18.6	2.2	B-4	黄灰色 (2.5Y4/1)	褐灰色 (10YR6/1)	凸面　縄目文の叩き痕、縄は右撚り使用、施文後に一部磨り消し 凹面　布目痕端部はケズリ調整	胎土は小砂粒を含む 還元焔焼成
14	平瓦	10.1	2.3	B-4	灰色 (N 6)	灰色 (N 6)	凸面　縄目文の叩き痕、縄は右撚り使用 凹面　布目痕	胎土は小砂粒を多く含む 還元焔焼成
15	平瓦	5.8	2.1	B-4	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	凸面　表面部欠損 凹面　布目痕 端部はケズリ調整	胎土は小砂粒を含む 酸化焔焼成
16	平瓦	8.2	2.0	B-4	にぶい橙色 (5YR7/3)	にぶい橙色 (5YR7/4)	凸面　格子文の叩き痕 凹面　粗い布目痕	胎土は砂粒を多く含む　酸化焔焼成
17	平瓦	8.9	2.0	B-4	にぶい橙色 (5YR6/4)	にぶい橙色 (5YR7/4)	凸面　格子文の叩き痕 凹面　粗い布目痕	胎土は2～4㎜の大粒の砂粒を含む 酸化焔焼成
18	平瓦	9.8	2.4	B-4	にぶい橙色 (5YR7/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/4)	凸面　格子文の叩き痕 凹面　粗い布目痕	胎土は砂粒を含む 酸化焔焼成
19	平瓦	11.8	2.8	B-4	灰色 (N 4)	黒灰色 (N 3)	凸面　縄目文の叩き痕、左撚りの太目の縄使用 凹面　布目痕	胎土は砂粒を含む 酸化焔焼成
20	平瓦	6.9	2.3	C-2	にぶい橙色 (5YR6/3)	にぶい褐色 (7.5YR5/3)	凸面　磨滅が顕著 凹面　粗い布目痕	胎土は砂粒を含む 酸化焔焼成
21	平瓦	13.9	2.4	C-4	灰褐色 (7.5YR6/2)	灰黄褐色 (10YR6/2)	凸面　縄目文の叩き痕、右撚りの縄使用 凹面　布目痕の上にヘラナデ	胎土は砂粒を含む 還元焔焼成
22	平瓦	9.4	2.2	C-4	にぶい橙色 (5YR6/3)	赤灰色 (2.5YR5/1)	凸面　格子文の叩き痕 凹面　布目痕端部はケズリ調整	胎土は砂粒を含む 酸化焔焼成
23	平瓦	9.3	2.5	C-5	灰色 (5Y4/1)	灰色 (5Y6/1)	凸面　縄目文の叩き痕、右撚りの縄使用 凹面　布目痕	胎土は砂粒を含む 還元焔焼成
24	平瓦	9.3	1.9	E-4	灰白色 (10YR7/1)	黄灰色 (2.5Y6/1)	凸面　叩きの後にヘラナデ 凹面　布目痕 端部はケズリ調整	胎土は砂粒を多く含む 還元焔焼成
25	平瓦	8.4	1.7	E-4	にぶい橙色 (5YR6/3)	暗灰色 (N 3)	凸面　平行条線文の叩き痕 凹面　布目痕	胎土は小砂粒を多く含む 還元焔焼成
26	平瓦	11.6	2.0	E-4	灰黄色 (2.5Y6/2)	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	凸面　縄目文の叩き痕、縄は右撚り使用、叩き後一部ヘラによる磨り消しがなされている。端部はケズリ調整 凹面　布目痕	胎土は砂粒を含む 酸化焔焼成
27	平瓦	8.9	1.9	F-5	橙色 (7.5YR6/6)	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	凸面　縄目文の叩き痕、縄は左撚り使用、 凹面　布目痕	胎土は砂粒を含む 酸化焔焼成
28	平瓦	8.7	2.2	F-5	灰色 (N 4)	灰色 (N 4)	凸面　縄目文の叩き痕、右撚りの縄使用 凹面　布目痕	胎土は砂粒を含む 還元焔焼成

第7表　布目瓦一覧表

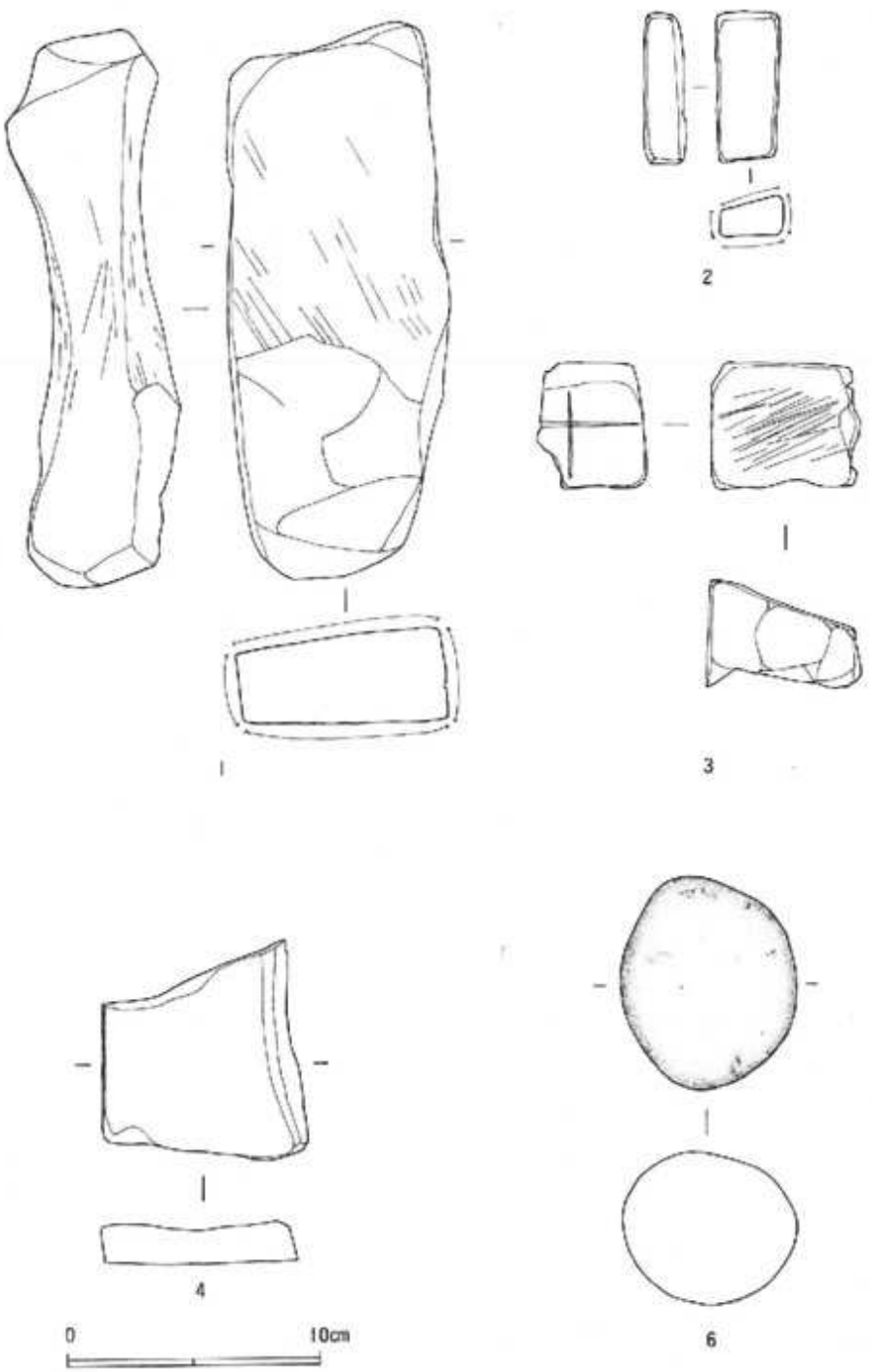
挿図番号	器種	法量(cm) 最大幅	器厚	出土G	色調 凹面	色調 凸面	器形の特徴、調整	備考
29	平瓦	8.4	1.7	F-5	黄灰色 (2.5Y5/1)	褐灰色 (10YR6/1)	凸面　格子文の叩き痕 凹面　布目痕	胎土は砂粒を多く含む還元焔焼成
30	平瓦	15.7	2.1	G-3	にぶい橙色 (7.5YR6/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	凸面　格子文の叩き痕 凹面　粗い布目痕 端部はケズリ調整	胎土は砂粒、長石を含む 酸化焔焼成
31	平瓦	6.6	2.1	G-5	灰色 (N 4)	灰色 (N 5)	凸面　縄目文の叩き痕、右撚りの縄使用 凹面　布目痕端部はケズリ調整	胎土は小砂粒を含む 還元焔焼成
32	平瓦	7.3	1.8	G-5	にぶい褐色 (7.5YR5/3)	にぶい橙色 (5YR6/4)	凸面　磨滅が顕著 凹面　布目痕	胎土は小砂粒を含む　酸化焔焼成
33	平瓦	9.0	2.2	G-6	灰色 (5Y4/1)	黄灰色 (2.5Y5/1)	凸面　縄目文の叩き痕、右撚りの縄使用 凹面　布目痕	胎土は砂粒を多く含む 還元焔焼成
34	平瓦	8.3	2.3	G-6	にぶい赤褐色 (5YR5/4)	明赤褐色 (2.5YR5/6)	凸面　格子文の叩き痕 凹面　粗い布目痕	胎土は小砂粒を含む 酸化焔焼成
35	丸瓦	7.6	2.0	B-4	灰白色 (10YR7/1)	にぶい黄橙色 (10YR7/2)	凸面　ナデ調整 凹面　布目痕 端部はケズリ調整	胎土は砂粒を含む 還元焔焼成
36	丸瓦	7.5	1.8	B-4	にぶい橙色 (5YR6/4)	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	凸面　ナデ調整 凹面　布目痕、1ヶ所指圧痕、端部はケズリ調整	胎土は砂粒を含む 酸化焔焼成
37	丸瓦	8.7	1.4	B-4	橙色 (7.5YR7/6)	にぶい橙色 (7.5YR7/3)	凸面　ナデ調整 凹面　布目痕、端部はケズリ調整、丸瓦の玉縁部分	胎土は砂粒を含む 酸化焔焼成
38	丸瓦	7.1	1.5	F-5	灰黄褐色 (10YR6/2)	褐灰色 (10YR6/1)	凸面　ナデ調整 凹面　布目痕、端部はケズリ調整、丸瓦の玉縁部分	胎土は小砂粒を含む 還元焔焼成

7．石製品

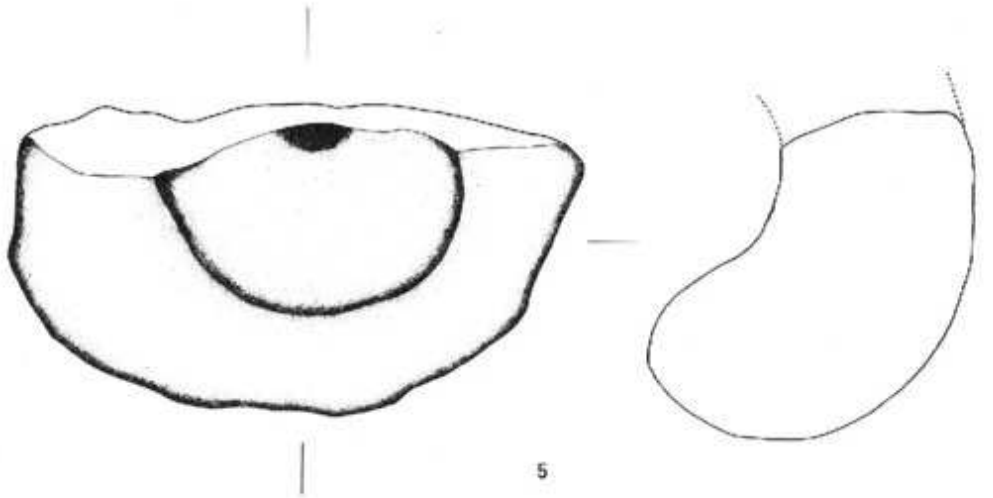
出土した石製品7点のうち、砥石は4点出土している。1は砂岩製の砥石で、4面砥の荒砥とみられる。砥石本体を固定して使用する置砥型砥石で、研ぎ方向が一定しており、表面は滑らかで磨耗による湾曲がみられる。

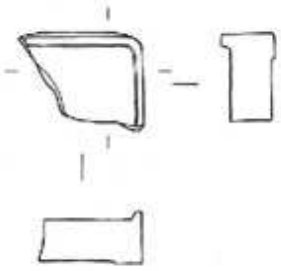
2、3は凝灰岩製で、共に四面砥の中砥とみられる。3は二面に、利器の刃部を研磨したと思われる斜めや十文字状の溝が刻まれている。2、3は研ぐ物を固定して砥石を動かして使用した手持ち型砥石である。4は砂石製である。四面砥の荒砥とみられる置砥型砥石で、表面が滑らかである。

5は軽石製の大型凹石で、凹部の磨滅からみてかなりの頻度で使用されたことが窺える。全体のほぼ½を欠損している。6は安山岩製の磨石である。端部に敲打痕がみられ、敲石としての使用も考えられる。7は硯の破片で、粘板岩製である。硯の縁部と陸部のみが残存している。石製長方硯が破損したものである。E－5グリッドの上層から出土しており、近世以降の遺物とみられる。



第23図　石製品実測図〈1〉　（1：3）





第24図　石製品実測図〈2〉（1：3）

第8表　石製品一覧表

挿図番号	器種	法量（cm） 残存長	残存幅	厚さ	重量（g）	石質	出土G	色調	備考
1	砥石	22.4	9.0	5.7	1,270	砂岩	D-5	浅黄色 (2.5Y7/4)	四面砥の荒砥とみられる
2	砥石	6.0	2.5	1.6	43	凝灰岩	D-6	灰白色 (2.5Y7/1)	四面砥の中砥とみられる
3	砥石	6.9	5.0	4.3	152	凝灰岩	E-3	灰白色 (2.5Y7/1)	四面砥の中砥とみられる 二面に金属を研磨した痕跡が残る
4	砥石	8.9	8.2	1.7	175	砂岩	F-3	浅黄色 (2.5Y7/3)	三面が使用されている。底部は板状に割れているため不明であるが、四面砥の荒砥とみられる。
5	凹石	22.0	12.0	12.5	2,910	軽石	F-5	黒色 (N 1.5)	大型の凹石。凹部の磨滅からかなりの頻度で使用されたとみられる。ほぼ½を欠損
6	磨石	8.5	7.0	6.1	510	安山岩	B-3	黄灰色 (2.5Y5/1)	磨石として使用。片端部に敲打痕があり敲石としての使用も窺える
7	硯片	4.9	3.8	2.1	44	粘板岩	E-5		硯の縁部と陸部のみが残存

8．銭貨

古銭は渡来銭の紹聖元宝が1点、寛永通宝が3点出土している。その他にG－2グリッド上層より、大正7年鋳造の一銭銅貨が出土したが、図示は行わなかった。1の紹聖元宝は径が24.1mmで方孔の大きさは銭文「紹」の下で6㎜、「聖」の左で5㎜あり、歪んだ方形を呈している。紹聖元宝は北宋銭で、初鋳年は1094年である。磨耗と腐蝕が全面にみられる。出土場所は調査地北東隅のB－1グリッド内で、地表下約30cmの黒褐色土層中より出土している。

2は寛永通宝で、径22.8㎜を測る。B－4グリッドから出土しており、磨耗は少ないが、銭文「通」の下に腐蝕して小孔があいている。3の寛永通宝は径24.4㎜で、C－5グリッドの上層から出土している。やや磨耗しており、周縁部が一部欠損している。

4の寛永通宝は径23.2㎜を測る。F－3グリッドの上層より出土している。保存状態は良好で、損耗はほとんどない。2，3，4の寛永通宝は、いずれも寛文8年（1668年）に鋳造が再開され、江戸末期まで造られた「新寛永」である。2，4は銅銭で、3のみが鉄銭である。3の鉄銭は明和以後の18世紀以後の鋳造とみられる。

第9表　銭貨一覧表

挿図番号	銭名	直径(cm)	重量(g)	出土G	初鋳年	時代	備考
1	紹聖元宝	2.41	3.4	B-1	紹聖元年(1094年)	北宋	磨毛と腐食が全面にみられる
2	寛永通宝	2.28	3.3	B-4		江戸	磨毛は少ないが、腐食して小孔があく
3	寛永通宝	2.44	3.5	C-5		江戸	上層より出土、やや磨毛し、周縁部が一部欠損
4	寛永通宝	2.32	3.5	F-3		江戸	上層より出土、保存状態は良好で損耗はほとんどない

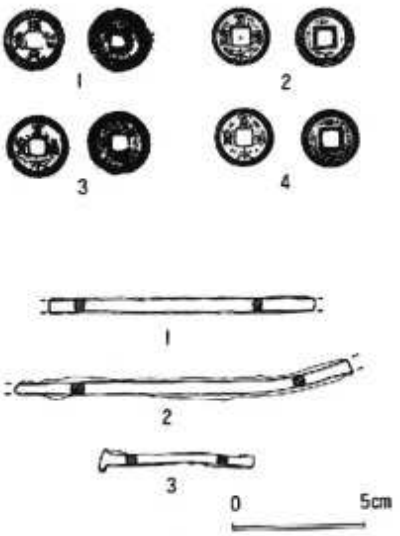
9．金属製品、鉄滓

金属製品、鉄滓は6点出土した。このうち角釘は3点出土している。1は残存長が10.5cmの断面方形の和釘である。両端部が欠損しており赤錆が全面に附着している。2は残存長が13.2cmの断面方形の和釘で、基部に曲がりが生じている。全面に赤錆が生じている。3は残存長が6.1cmの断面方形の和釘である。釘の頭部は叩いて折り曲げられており、折曲頭角釘に分類される。全面が赤錆に覆われている。1，2，3の角釘は、いずれも礫や河原石の集石群の下層から布目瓦片と混在して出土しており、共に平安時代の角釘とみられる。

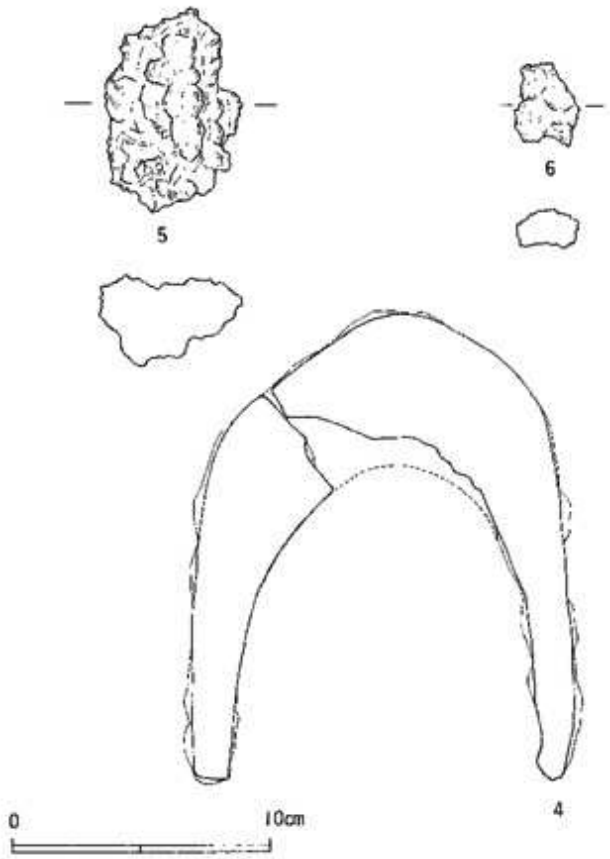
4は長さ18.3cm、重量355ｇの鉄製鋤先である。赤錆が全面を覆っている。その形態より、近世以降のものとみられる。5，6は鉄滓である。調査地区の西南隅に位置するG－6グリッド内から出土している。5の鉄滓は表面に気泡状の小孔がみられ、部分的に赤錆が附着している。重量は138ｇあり、暗赤褐色からにぶい黄褐色を呈している。

6は表面に赤錆が附着しており、重量は21ｇある。暗赤褐色からにぶい黄褐色を呈している。

（倉沢正幸）



第25図　銭貨拓影図、角釘実測図（1：1）



第26図　金属製品、鉄滓実測図（１：２）

第10表　金属製品、鉄滓一覧表〔土器〕

挿図番号	器種	法量 残存長	残存幅	(cm) 厚さ	重量 (g)	材質	出土G	備考
1	角釘	10.5	0.62	0.41	16.1	鉄	E-3	端部欠損
2	角釘	13.2	0.51	0.48	19.2	鉄	F-5	端部欠損
3	角釘	6.1	0.41	0.38	6.1	鉄	F-5	端部欠損
4	鏃先	18.3	1.5 ～4.9	0.8	355	鉄	B-3	形態より近世以降の製造とみられる
5	鉄滓	7.6	5.4		138	鉄	G-6	表面に小孔がみられ、部分的に錆が附着している。色調は暗赤褐色からにぶい黄褐色
6	鉄滓	3.2	2.6		21	鉄	G-6	表面に錆が附着、色調は暗赤褐色からにぶい黄褐色

第IV章　ま と め

地層について

表土は約30～40cm、その下層は拳大ほどの礫混じりの砂層約20～30cm（包含層）、その下層は径1m以上を越す巨礫が累々と重なり合っている礫層と砂層の互層である。巨礫群は幅3m～4mにわたり、北東から南西方向にわずか傾斜を持ちながら、いく筋も走っていて、かつての河床礫であることは確実である。礫群と礫群の間は土砂が一杯に詰まり、遺物が含まれている。

国分尼寺の西限について

国分尼寺の寺域については、北限と東限は昭和42年、44年の調査の際、15cm前後の川原石の約60cm幅に敷き詰めた個所を検出し寺院の四至を巡らす築地塀の根石とわかった。しかし西限は民家の建ち並ぶ部落内にあったため調査はなされなかった。今回一部ではあるが丁度西限の境に当り築地塀跡の発見は期待されたのであった。しかし表土中より検出された礫群中の礎石と思われる数点は、近現代の建築の基礎に用いられたものであった。包含層排除後の三層面は敷石列も、他から運びこまれたと認められる礫も見当らず、自然堆積による礫群であった。包含層内には遺物も多くみられ発見されたが、いずれも磨耗の烈しい小破片で、上流よりの混入物であり、国分尼寺の寺域の境を示す資料にはならなかった。

築地塀との推定線が引かれている個所は丁度住居址やその他の遺構があり、この遺構の構築時に今までの構造物（築地塀）を破壊撤去したとも考えられる。いずれにしろ、今回の調査では築地塀跡の痕跡は確認できなかった。

遺構について

遺構は礫群と礫群の合間に堆積した砂層中に構築されていた。住居址は両址とも遺構の大部分が調査区域外にあったため一部分の調査に余儀なくされたが、1号址のプランと2号址のカマドの全貌はようやくとらえ得た。1号址の大きさは 2.5m× 2.6mで隅丸方形のプラン、2号址のカマドの規模は全長1.16m、最大幅0.75m、煙道 0.7mを測り、当地方に発見される平安時代の住居址で、布目瓦など国分寺址の残材を利用した形跡以外は、プラン・規模等普通民家の住居である。

遺物について

遺構にともなう土器は土師器、須恵器、灰釉陶器など数多く検出された。住居址から検出された土器群の割合は、大部分が土師器であるが、須恵器より灰釉陶器の量が多い傾向にあり、須恵器優位より時代が降ることを、意味し、平安時代も大分降る所産であろう。なお土師器の坏は内

両黒色研磨され、切離しの底部は回転ヘラケズリ、貼り付け高台等の特徴、重ね焼きによる大量生産されたと推定でき、組雑な東濃系の灰釉陶器は一層時期と地域性を明確に裏づけられる資料となろう。

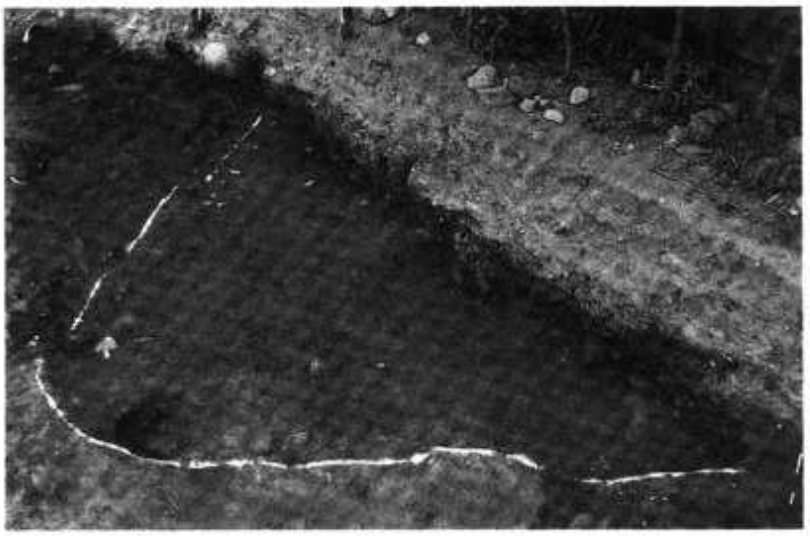
2号住居址より緑釉の高台付塊の破片の検出をみたが、普通住居址にはほとんど検出されることはない。従って民家の生活用品ではなく何か寺院か信仰に関係のある器物であろうが、しかしこの一点のみで、追究は今後の課題としたい。なお製作時期については灰釉陶器と同時期ぐらいのものであろう。

その他、グリッド内から多岐にわたる遺物が検出された。時期も平安時代以降、中世、近世、近代現在まで続いている。遺物の内容は布目瓦以外は寺院色の少ない民家の生活用品具である。国分寺が衰退し現位置に移転後、この地域は開放され、一般民の生活の場所と化し、以後は今日まで変わることなく続いている様態が理解される。（岩佐今朝人）

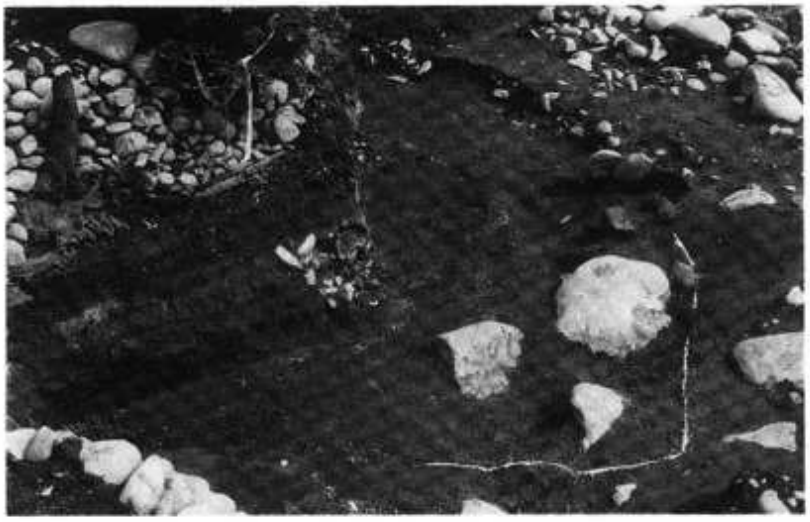
調査地区全景
（南西側より）

調査地区全景
（北東側より）

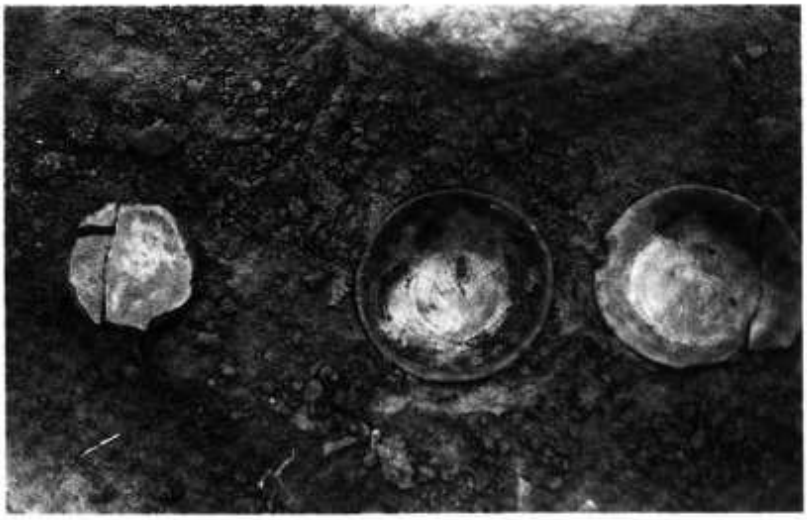
ピット溝址



第1号住居址



第2号住居址
（南側より）



第2号住居址
遺物出土状況

第２号住居址（北側より）

第２号住居址竈

第2号住居址遺物出土状況

11

13

12

14

第1号住居址出土遺物

1

31

2

34

3

40

4

41

5

6

42

7

第２号住居址出土遺物

44

45

第２号住居址出土遺物

13

40

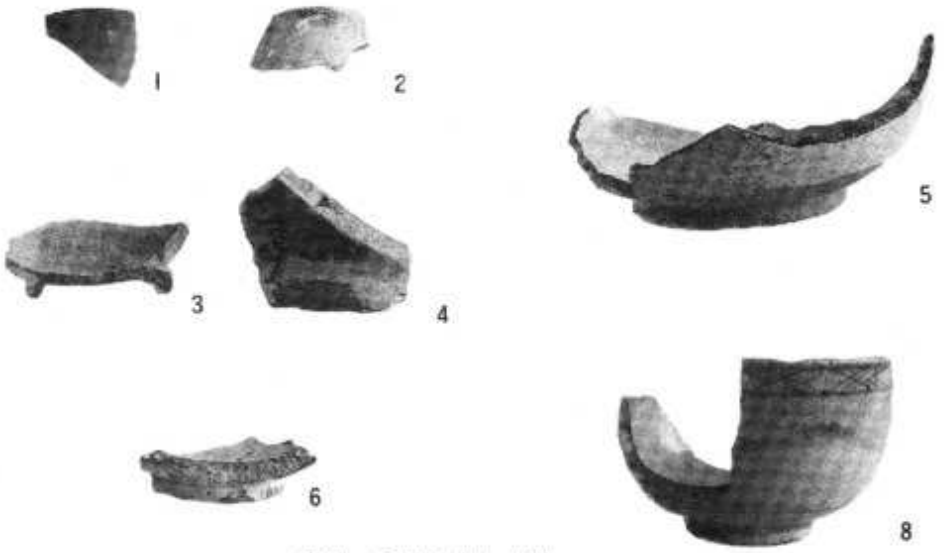
28

43

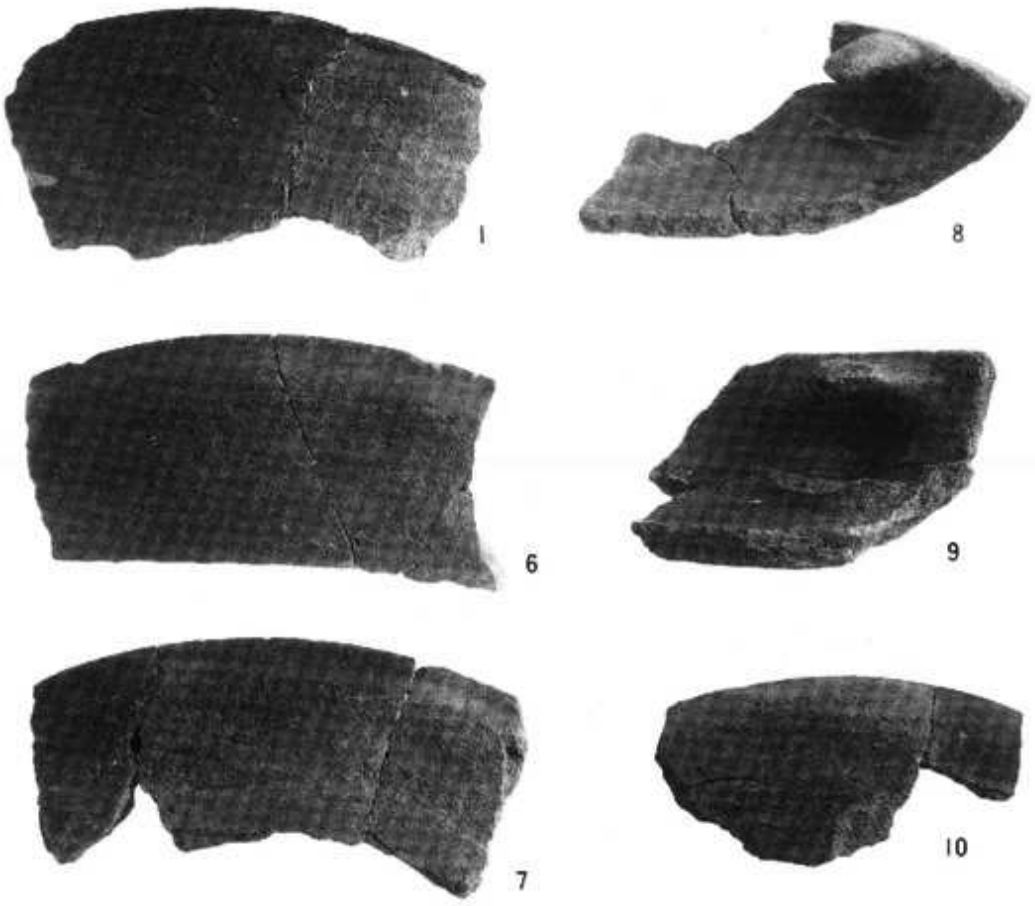
37

51

各グリッド内出土遺物



中世、近世の出土土器



内耳土器

13

16

同耳土器

7

30

13

35

36

21

37

38

布目瓦

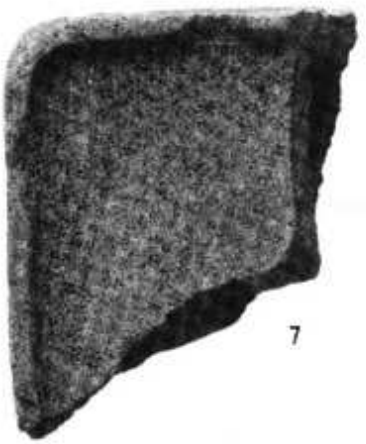
1

2

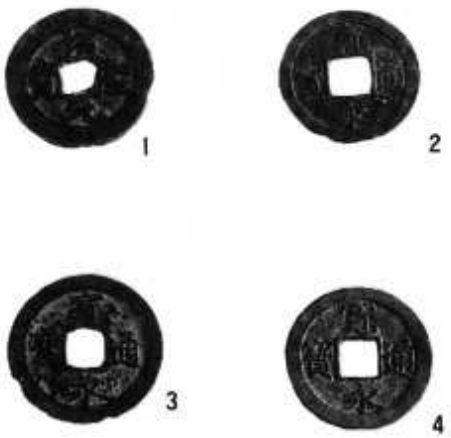
3

4

5


7

石製品



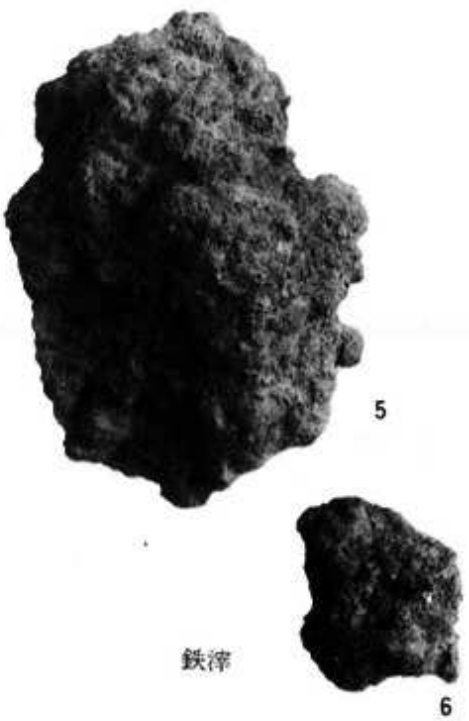
1　2　3　4

銭貨

3　2　1

角釘

鋤先　5



5　鉄滓　6

あ と が き

この報告書は、序文・調査の経過の項などで述べているように、史跡信濃国分寺跡の指定地範囲内で、山辺資保氏所有地の現状変更申請にもとずく、緊急発掘調査の結果である。筆者はさきに上田市教育委員会で行った、信濃国分寺跡の発掘調査のとき、その調査員の一人としてかかわった経緯があったことから、今回の調査に参加させていただいた次第である。

調査設計書をもとに現地での打ち合わせ時に、調査対象地が、尼寺跡の西築地塀跡推定地にあることを知り、調査結果に大きな期待をもつことができた。というのは、さきの調査のとき、私は僧寺域の西築地塀跡の発掘調査を担当した経験があったからである。その時には築地塀の基礎部の石列を知ることができ、僧寺域の西限を確認することができた。尼寺跡の西の築地塀跡地は調査対象地範囲外となっていたため、推定による結果となっていた。後日に調査機会の得られることを期待していたからである。

発掘にあたっては、地権者の山辺氏は調査団からの申し出を心よく聞きいれてくれ、発掘可能地域を全域に亘って、発掘することができた。山辺氏に敬意と感謝の意を表するものである。また調査団員のみなさんをはじめ、上田市教育委員会事務局、および協力者の方々には、熱心に参加していただき、調査作業が予定通り終了することができた。その後関係者によってこの報告書ができた。御協力いただいたみなさんに心より感謝申し上げる。

発掘調査の結果については、報文の通りである。当初、私が期待した尼寺跡の西築地塀跡については、確認することはできなかった。発掘調査範囲の東側縁のうち、南北方向約10mがその対象地に当るが、たまたまそこは、東側縁よりさらに東側で尼寺跡地と同位面にある畑地とが、高さ1mほどの比高差をもった石垣による境界線にあたっている。尼寺の西の築地塀跡は東側上段にある畑地内にあるのか、後世の土地造成工事によって石垣下段となった、今回の発掘調査地域内にあり、すでに破壊されているのか、今後の調査研究への課題となった。

発掘範囲全域は尼寺の推定西築地塀の外にあることから、ここには、信濃国分寺、ことに尼寺に関係のある遺構の存否について関心をもったが、発掘結果については、報文の通り平安時代のものと推定できる住居址の一部を知ることができたが、国分寺との関連を知ることはできない。また全域に亘って人頭大を中心とする大小の角礫、円礫が多数散在しており、一部にはその配置に人工の跡と推定できるところもあったが、そのプランや性格などを知ることができなかった。これらの石列の解釈にはさらに広範囲の発掘調査の結果などの関連を待たなければならない。今回の調査は、発掘にいたるまでの経過を含め、史跡信濃国分寺跡指定地内の緊急発掘調査のよき指標となるものと信じ、成果の大きかったことをうれしく思う。

関係者のみなさんに再度謝意を表して結言とする。

（団長　五十嵐幹雄）

上田市文化財調査報告書第34集
史跡信濃国分寺跡
史跡現状変更申請に伴う緊急発掘調査報告書
発行　1989年3月25日
上田市教育委員会
印刷　上田印刷株式会社